

	The Eastern Buddhist Societyと大谷大学の仏教研究	1
	2016(平成28)年度「指定研究」等研究経過報告	2
	2017(平成29)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(追加)	9
	2017(平成29)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介	10
	2016(平成28)年度「一般研究」研究成果概要	11
	海外学会参加・研究調査報告	21
	国内研究調査・学会参加報告	31
	歎異抄ワークショップ開催報告	34
	公開講演会・公開研究会	35
	彙報	39

The Eastern Buddhist Societyと大谷大学の仏教研究

国際仏教研究 研究代表者・教授 井上 尚実

2017年4月1日、創立以来96年の長い歴史を誇るThe Eastern Buddhist Society (EBS、東方仏教徒協会)が正式に大谷大学真宗総合研究所の組織に加わり、新たな活動の一步を踏み出した。EBSの大谷大学への移管は、3月31日に急逝された安富信哉EBS事務局長・大谷大学名誉教授(1944-2017)の念願が叶ったものであるが、「仏教を基盤とする大学として、人間と社会、その文化について探究し、その成果を国内外に向けて公開する」という大谷大学グランドデザインの研究に関する方針に沿うものであり、特に「仏教研究を学問的なレベルで世界に発信する。学術活動の国際化を推進し、国際ネットワークを構築する」という二つの目標を実現するために大きな意味をもつ。

EBSは1921年の創立以来、大谷大学の仏教研究と深い結びつきをもって発展してきた。設立初期の中心メンバーは鈴木大拙(1870-1966)、佐々木月樵(1875-1926)、山辺習学(1882-1944)、赤沼智善(1884-1937)という国際的視野をもった当時の大谷大学仏教学の教授たちであった。浩々洞で清沢満之に学び、仏教学者として大乘仏教および浄土真宗の教学を研究していた佐々木月樵が、英語で大乘思想を語ることに秀でた鈴木大拙を大谷大学に招聘して創刊されたのが英文学術誌*The Eastern Buddhist* (EB誌)である。浩々洞の同人であった山辺習学と赤沼智善は、1914年に真宗大谷大学研究科を卒業してインド・スリランカ・イギリスへ長期留学し、京都に帰って大谷大学教授に就任すると同時にEBS設立に加わり、初期EB誌に優れた論文を寄せている。EB誌は当時の大谷大学における仏教学・真宗学の研究成果を世界に発信し、西洋ではまだ正当に認識されていなかった大乘仏教・親鸞思想の重要性を伝えていく役割を担ったのである。1924年、第三代学長となった佐々木月樵は、『大谷大学樹立の精神』の中で次のように述べている。

研究の一部分は英文『東邦仏教徒』を発行して、

多少にても今日では、仏教の研究を世界に輸出し得るまでに至りしことは、実に同慶至極に存ずる次第である。されど、我々はこれ位では満足さるべきではないのである。

(『大谷大学樹立の精神』1925年)

1926年に佐々木学長が急逝すると、その遺志を継いだ鈴木大拙がEB誌発行を継続し、大乘仏教を世界の学界に解放する仕事を続けた。その努力は1950年代に実を結び、D. T. Suzukiと*The Eastern Buddhist*の名は、仏教に関心をもつ欧米人に広く知られるようになった。20世紀後半の大乘研究をリードした世界の仏教学者の多くが、EB誌やD. T. Suzukiの著作に触れたことをきっかけに大乘仏教に関心をもったと語っている。さらに親鸞思想が欧米に浸透する先駆けとしてのEB誌の貢献も見逃せない。例えば第2バチカン公会議(1962～1965)に参加した有力な神学者Henri de Lubac(1896-1991)による画期的な真宗研究*Amida (Aspects du bouddhisme II, 1955)*は、初期EB誌所載の鈴木大拙と佐々木月樵の論考に基づいた非常に深い浄土真宗理解を示し、現代カトリック神学界に親鸞思想の意義を伝えている。

1966年の鈴木大拙没後も、EB誌はNew Seriesとして発行を継続し、大谷大学を拠点に長い伝統を形成してきた。5年後にEBS創立100周年を迎える今年には好機に恵まれ、本学が計画した「仏教を基軸とする国際的研究拠点の形成と〈人間学〉の推進」が、文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」(タイプB:世界展開型、2017～2021年度)の支援対象に選定された。この夏には、新しい専任編集者としてJohn LoBreglioを迎え、EBSの組織も補強されている。2021年の100周年に向け、国際的「ブランド」*The Eastern Buddhist*が大谷大学の仏教研究と改めて連携を深め、さらに大きな役割を果たしていくことが期待される。

2016（平成28）年度「指定研究」等研究経過報告

教如上人研究

真宗大谷派・東本願寺開祖である 教如上人に関わる史料の調査と研究

研究代表者・教授 草野 顕之
(日本仏教史・真宗史)

真宗本廟（東本願寺）の実質的な開祖ともいべき教如上人（永禄元年＝1558～慶長19年＝1614）の研究は、「大谷派なる精神」、大谷派存立の理念と存在理由を明らかにするという意義を有している。本研究班では、教如上人に関する史料の全面的・組織的な調査を実施し、それらを体系的に整理して、内外に成果を問うことを目標として活動を行ってきた。

〈研究会〉

最終年度にあたる2016年度は、2回の研究会を実施した。2016年12月21日(水)の第11回研究会では、研究成果の現状確認と総括に向けて意見交換を行った。現状として、教如上人関係史料のデータ1,200点強が収集整理されていること、そのデータをもとにすると、真宗史・中近世移行期の社会史などに新たな知見が見いだせる可能性を確認したうえで、中間報告をまとめて3年間の活動の総括とすること、今後さらに研究班の活動を継続させていくことの必要性についても確認した。

次に2017年2月8日(水)の第12回研究会では、工藤克洋氏より「戦国期の笠原本誓寺について—高田本誓寺調査史料—」と題する研究報告が行われた。これは、2016年に実施した上越市高田本誓寺の調査成果をもとにしたもので、本誓寺に残された戦国期の書状について、従来は後世の作であるとする研究などもあったが、今回の調査で撮影した画像などをもとに、あらためて検討を加えた結果、当該期の史料が多くあるとの見解が提示された。これによって、教如班による調査が、研究の新たな可能性を開くことに寄与できていることが確認された。

〈調査〉

2016年度には、西念寺（山科区）・本誓寺（上越市）・光照寺（山科区）・萬因寺（山科区）・東光寺（下京区）・徳正寺（下京区）・妙蓮寺（福山市）の調査を実施した。

以上でひとまず3年の年限を終えたが、調査・研究はまだまだ必要である。また寺院の歴史・文化的側面の発見・活用に寄与できる可能性も高く、真宗総合研

究所の研究班として活動を再び行えるように準備をしていきたい。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究を 更に進め、その成果を『清沢満之 全集』の補遺として、発刊する

研究代表者・准教授 藤原 正寿
(真宗学)

本研究は清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的としている。大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店、『全集』と略）の刊行以来、清沢研究や近代仏教史研究等の諸分野において『全集』は広く多くの研究者に読まれ、その研究の進展に大きく寄与している。2014年度に活動を再開した本研究では『全集』に未収録の文献を収集し、刊行することを主な目的としている。

本年度は、以下の3点を柱に研究を進めた。

- ① 新出清沢満之著述の収集、翻刻、校正
- ② 補遺編集に向けた研究会の開催
- ③ 新出清沢満之著述群の内容検討

清沢満之研究が収集してきた西方寺蔵清沢自筆稿の翻刻作業を継続するとともに、本年度まで新たに収集した文献の翻刻・校正を行った。本年度は三度の調査により新出文献を収集した。2016年11月11日に西方寺で『全集』未収録の清沢自筆書簡4点と、句仏上人の清沢宛書簡3点等の撮影。2017年2月20日に唯法寺で占部観順筆の清沢宛書簡（未開封、未郵送）を確認し撮影。2017年3月12、13日に東洋大学で開催された森岡清美著『真宗大谷派の革新運動—井上豊忠のライフストーリー』書評会で、森岡氏に井上豊忠宛清沢自筆書簡（山形県長井市の井上豊忠自坊法讚寺蔵）の撮影データの提供について協議し、後日、ご提供いただいた。

2017年2月23日に星野靖二國學院大学准教授をお招きして公開研究会を開催。星野氏には『全集』未収録の清沢論稿を含む『経世博議』全号のデータをご提供いただいた。

本研究は本年度で3年の研究期間を終える。この3年間で、新出の清沢満之著述と認めることができる37点の文献を確認し内容検討の結果、32文献が『全集』掲載基準を満たすことを確認している。これらの中で森岡氏提供の文献を除いては2016年度末までに翻刻済みであり、併せて刊行に向けて構成案の検討を進めた。

未発見の文献（清沢の日記等の記述による執筆情報はある）を含め、今後も新出文献が見出される可能性は極めて高いと考えられる。それらの点も踏まえると、『全集』の「補遺」ではなく「別巻」としての刊行が望ましい。概算で『全集』2巻分の文献を翻刻済である。今後、これらを順次刊行していくことが喫緊の課題である。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。本年度も英米班、ドイツ・フランス班、東アジア班の三班に分かれて研究活動を進めた。各班の研究結果の概要は以下の通りである。

(英米班)

I. 翻訳研究

- (1) 『浄土の真宗』『宗門の歩み』英訳出版への協力
阿満道尋嘱託研究員（アラスカ大学アンカレッジ校、2017年からモンタナ大学）を中心に進めてきた大谷派教師課程教科書『浄土の真宗』の英訳が完成し、*An Introduction to Shinran's Pure Land Buddhism* (Shinshu Center of America, 2016) として北米開教区真宗センターから出版された。『宗門の歩み』については2017年度に継続。
- (2) 『歎異抄』翻訳研究プロジェクト
大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関が協定を結び、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトを立ち上げた。今後5年間の予定で年2回（3月にバークレー、8月に京都で1回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に2冊の研究書（注釈付き本文英訳と研究論文集）出版を目標とする。その第1回ワークショップが2017年3月24日から27日にバークレーで開催され、マイケル・コンウェイ研究員と公募で選ばれた真宗学科大学院生2名が参加した（*詳細は『所報』

70号掲載の報告を参照）。

II. 国際学会・シンポジウム

(1) 国際学会への参加

- 2017年3月1日(水)～4日(土)、ミズーリ州カンザスシティで開催された第114回 アメリカ哲学会中部学術大会 (American Philosophical Association Central Division Meeting) において、田中潤一准教授とマイケル・コンウェイ研究員が以下の研究発表を行なった。
- ①田中潤一「仏教精神を教育することの可能性－田辺哲学の観点から」"The Possibility of Teaching the Spirit of Buddhism – From the Standpoint of Tanabe Philosophy –"
 - ②マイケル・J・コンウェイ「曾我量深の思想における宿業と根源的責任」"Past Karma and Radical Responsibility in the Thought of Soga Ryōjin"
(*詳細は『所報』70号掲載の報告を参照)

(2) シンポジウムの開催

2016年5月26日(木)・27日(金)の2日間、大谷大学メディアホールにおいてハンガリーのエトヴェシ・ロラード大学 (ELTE) 東アジア研究所との共催で第2回国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈 The Buddha's Words and Their Interpretations」を開催した。本学からは以下の9名が発表を行なった。

- ①織田顕祐「釈尊観としての大乗経典—存在を通して言葉を読む—」"The Mahāyāna Sūtras as a View of Śākyamuni: Reading Words through Existence"
- ②箕浦暁雄「経と論—仏陀の言葉を受けとめるということ」"Sūtra and Abhidharma: Taking in the Buddha's Words"
- ③井上尚実「他力としての仏陀の言葉：「教示し、励まし、鼓舞し、喜悅せしむ」という表現 Expressive Phrase *samdarśayati samādāpayati samuttejayati samprahorśayati*”
- ④上野牧生「世親の『釈軌論』における「仏陀のことばとその解釈」"The Buddha's Words and Their Interpretations in Vasubandhu's *Vyākhyāyukti*”
- ⑤加来雄之「我、仏教と相応せり—『大無量寿経』と「優婆提舍」—」"I Correspond to the Buddha's Teachings": The *Larger Sutra of Immeasurable Life and Upadesa*”
- ⑥ロバート・F・ローズ「天台解釈学」"Tiantai Hermeneutics”
- ⑦マイケル・J・コンウェイ「道綽の創造的引用法について」"Daochuo's Creative Quotation Practices”
- ⑧藤嶽明信「第十八願文と成就文についての解釈

—善導・法然・親鸞を通して— “Interpretations of the Eighteenth Vow and Its Fulfillment Passage: In the Thought of Shandao, Hōnen, and Shinran”

⑨藤元雅文「仏陀の教説についての親鸞の視座—教の権実を中心に—」 “Shinran’s Viewpoint on the Buddha’s Teaching: Centered on the True Teaching and Provisional Teachings”

(*シンポジウムの詳細については『所報』69号所載のコンウェイ研究員による報告を参照)

(3) シンポジウム成果の出版準備

① *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版記念シンポジウム成果出版

2015年6月に本学で開催された真宗近代教学アンソロジー-英訳出版記念シンポジウムの成果を学術書として出版する計画を立て、編集作業を進めている。マーク・L・ブラム教授(嘱託研究員)とマイケル・J・コンウェイ研究員の共同編集により欧米の大学出版から出すことを目指し、8月にコンウェイ研究員がバークレーに出張した(*詳細は『所報』69号所載のコンウェイ研究員による報告を参照)。

② 国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」(ELTE東アジア研究所と共催) 成果出版

2016年5月に開催されたシンポジウムの成果を出版するための作業を進めている。ELTEのハマル・イムレ教授と井上尚実研究員の共編で、2018年3月末までに出版の予定。

Ⅲ. 公開講演会の開催

以下のような3回の公開講演会を開催した。

(会場はいずれも響流館3階マルチメディア演習室)

(1) 2016年5月25日(水) 16:30~18:00

講師: ラズロ・ボルヒ氏 Prof. László Borhy (ELTE 人文学部長、ハンガリー)

講題: 「ローマと初期ビザンチン芸術における天界と永遠の時間の表現について: プリゲティオのローマ様式壁画の解釈」 (Representation of celestial spheres and eternal time on vaults and domes in Roman and Early Byzantine art: Interpretation of a Roman Wall-Painting from Brigetio)

(2) 2016年7月12日(火) 16:20~17:50

講師: ヤコブ・ザモルスキー氏 Dr. Jakub Zamorski (ヤギェウォ大学、ポーランド)

講題: 「浄土の信者はなぜ唯識学を必要としているのか—東アジア仏教思想史における“近代教

学」(Why do Pure Land Buddhists need Consciousness-only? “Modern doctrinal studies” of Jōdo Shinshū in the history of East Asian Buddhist thought)

(*講演会の詳細は『所報』69号所載の井上研究員による報告を参照)

(3) 2016年7月29日(金) 16:20~17:50

講師: ジェシカ・スターリング氏 Jessica Starling (ルイス・アンド・クラーク大学、アメリカ)

講題: 「非尼僧非俗女: 仏教界における宗教専門職の女性について」 (Neither Nuns nor Laywomen: Female Religious Professionals in the Buddhist World)

(*講演会の詳細は『所報』69号所載の梶研究補助員による報告を参照)

Ⅳ. その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、研究所所蔵の欧文仏教雑誌とデータ・ベースを照合し、欠本や図書館で継続購入している雑誌との重複などについて整理する作業を進めた。

〈ドイツ・フランス班〉

Ⅰ. 翻訳研究

ディートリッヒ・コルシュ教授(マールブルグ大学神学部)の著書 *Martin Luther: Eine Einführung* の和訳『ルター入門』を宗教改革500周年となる2017年に出版するため仕上げの作業を進めた。

Ⅱ. その他

2010年にフランス国立高等研究院(EPHE)の宗教社会学部門(GSRL)と開催したシンポジウム「フランスと日本におけるナショナル・アイデンティティと宗教」の成果刊行についてGSRLのポルチエ教授に進捗状況を確認した。

〈東アジア班〉

Ⅰ. 研究会

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動として2回の研究会を開催。

(1) 2016年11月16日(水)に中国社会科学院歴史研究所より2名の研究者を招聘し、響流館4階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて研究発表および討論を行った。それぞれの発表者と発表テーマの以下の通り。

① 趙 凱 (中国社会科学院歴史研究所社会史研究室副主任、副研究員)

「“茲杖靈木、以介眉寿(このれいぼくをつえつき、

もってびじゅをたすく)”一出土物からみた秦漢時代の用杖習俗」

- ②康 鵬(中国社会科学院歴史研究所宋遼金元史研究室助理研究員)

「Sharaf al-Zamān Tāhir Marvaziの書中における契丹の“都城”—遼代の中西交通ルートの検討を兼ねて」

- (2) 2017年3月7日(火)に大谷大学より2名の研究者が中国社会科学院歴史研究所を訪問し、研究発表および討論を行った。それぞれの発表者と発表テーマは以下の通り。

- ①井黒 忍(大谷大学准教授)「近世・近代華北の水利権売買に関する一考察：山西・陝西・河南の事例に基づいて」
- ②濱野亮介(大谷大学任期制助教)「明代民間宗教儀礼における「瑜伽(教)宗」

西藏文献研究

チベット語文献及びパーリ語 貝葉写本のデータベース化

研究代表者・准教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

1. チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

以下の文献の電子テキストを研究班のホームページ上に公開した(<http://web1.otani.ac.jp/crri/twrpw/results/e-texts/sherapjinba/>)。

ニマ・タンパ=シェーラプ・ジンパ『中観学説決択集』(蔵外No. 13949～13954)

また、以下の稀覯文献のテキスト公開・出版に向けた作業をおこなった。

シャクリンパ『プラサンナパダー注』(蔵外No. 13964)

2. モンゴル国立大学との共同研究

U.エルデネバト先生(考古学)とM.ガントヤー先生(仏教学)を招き、共同研究を実施するとともに、公開講演会を開催した。詳細は、『所報』No.69(p.31)参照。

また、モンゴル国ウブスハンガイ県ハラホリン郊外にある仏塔遺跡の表面計測調査のため、嘱託研究員・山口欧志氏を派遣し、現地調査と計測作業を実施した。詳細は、『所報』No.69(p.23)参照。

3. パーリ語貝葉写本のデジタル化

タイ中部地域の王室寺院所蔵未整理写本所在リストの

整理作業を行った。その作業で確認され本学所蔵写本と関連する稀覯文献の検討と撮影作業のため、タイに清水洋平・舟橋智哉(ともに当研究班嘱託研究員)の両氏を派遣した。詳細は、『所報』No.69(pp.22-23)参照。

2015年度に実施した公開ワークショップの成果の一部を、清水洋平氏が第30回パーリ学仏教文化学会(2016年6月4日、於：愛知学院大学)で発表した。

2016年12月15日～16日には、布等の分野の専門家(佐藤留実=五島美術館、原田あゆみ=九州国立博物館)と共に、本学所蔵写本と包み布の調査・研究を行った。

東洋文庫所蔵パーリ語貝葉写本調査のため、清水洋平・舟橋智哉の両氏を派遣した。

4. 寺本婉雅関連借用資料の整理

村岡家・宗林寺両資料に対する総合的な評価を取りまとめ、『研究紀要』No.34(pp.1-19)に寄稿した。

5. 海外の研究者・研究機関との交流

ノルウェーのベルゲン大学で開催された第14回国際チベット学会に三宅が、中国・北京の中国蔵学研究中心で開催された第6回北京国際チベット学セミナーに嘱託研究員ツルティム・ケサン(白館戒雲)氏が参加し、それぞれ研究発表を行った。詳細は、『所報』No.69(pp.21-22)参照。

中国蔵学研究中心との研究交流に向けた話し合いのため、上野牧生研究員と三宅を北京に派遣した。詳細は、『所報』No.70(pp.22-23)参照。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー 宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授 織田 顕祐
(仏教学)

本研究は、ベトナム社会主義共和国のベトナム社会科学アカデミー宗教研究院(以下、「宗教研究院」との間で締結された協定に基づき推進する共同研究である。

昨年度より進めてきた『日本仏教概説』については、執筆状況の確認と意見交換を継続的に行ない、日本語原稿の大半が揃うにまでなった。現在も継続して執筆者との連絡を取り続けている。

宗教研究院トゥアン院長(当時)によって著された『ベトナム仏教史』の日本語訳作業も、大西和彦(嘱託研究員)の協力によって、大きく進展した。

また、織田顕祐（研究代表者）がベトナムを訪れて、2016年8月24日(木)～25日(金)には、大西和彦（嘱託研究員）の同行を得て、トゥアン院長（当時）をはじめとする宗教研究院の人々と打合せを行ない、「概説」の進捗状況の報告・確認とともに今後の研究の進め方について意見交換を行なった。その後、現地の仏教寺院をいくつか調査するとともに、ベトナムの仏教状況を表す書籍を現地書店において購入することができた。

さらに、ベトナム仏教の基本典籍である『禅苑集英』の読解を、宮嶋純子（現嘱託研究員）の協力の下に開始し、継続的に研究会を進めている。この書はベトナム仏教において中心的と考えられてきた高僧についての伝記を集めたものであり、極めて重要な書物である。しかしながら、本書についての研究は、これまで日本ではほとんどなされていない。この書の読解によって、日本におけるベトナム仏教研究は大きく進展することになる。読解が完了した暁には、本研究紀要への発表を予定している。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 松浦 典弘
（東洋史学）

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の収集、整理・保存、公開である。

整理・保存の面では、昨年度から引き続き、武田武麿先生（元大谷大学教授）から寄贈された資料の整理と目録のチェック作業を行っている。また、当資料室所蔵のフィルム資料については、経年劣化から防ぐために、未整理フィルムのデジタルデータ化を進めるとともに、デジタルデータ化が終了した旧「学事史研究班」の撮影フィルムや『近代100年のあゆみ』のフィルム等の目録作成を行っている。

公開の面では、図書館1階エントランスを借りて、2回にわたって当資料室が所蔵している資料の展示を行った。旧至誠館から2001年の響流館竣工に伴い移動した図書館にスポットを当てた「大谷大学の歴史をたどる～図書館トリビア～」、1901年に近代化された大学をめざして開校してから今にいたるまでの大谷大学の歴史を写真や資料で紹介した「年表で見る大谷大学のあゆみ」である。

また、大学史関係資料の保存・公開のノウハウを得

るために、全国大学史資料協議会の全4回の研究会に参加し、また他大学の博物館へ見学に行った。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

元嘱託研究員・准教授 松浦 典弘
（東洋史学）

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。本資料室は、この未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存するための活動を行ってきたが、2016年度末を以て作業に一区切りをつけ閉室した。

資料は段ボール箱に入れて仮番号を付しており、その数171箱。2016年度は閉室に向けて、まずは早期に資料の総数を把握すべく、整理番号・資料名称・点数の採録を進めた。その結果、目標通り資料の総数の把握作業を終えることができた。

また本資料整理の補助作業として、これら資料の記事と対比しての確認あるいは補足をするために、『宗門開教年表』（真宗大谷派宗務所 1969）所載の記事を基礎データとして入力し、東本願寺の機関誌（『真宗』『宗報』など）の関係記事を抽出した。さらに『宗門開教年表』が典拠とする『朝鮮開教五十年誌』（大谷派本願寺朝鮮開教監督部 1927）・『東本願寺上海開教六十年史』（東本願寺上海別院 1937）・『華北宗教年鑑』（興亜宗教協会 1941）・「現如上人年譜」（『宗史編修所報』9号 1935）などの関係記事も抽出してきており、これらはほぼ完了するに至っている。

なお具体的な作業方法は下記の通りであり、史料の性質上、(a) 真宗総合研究所と (b) 図書館・博物館事務室との2カ所において行った。

- ① 事務書類綴りの状態になっている資料についてその内容を確認し、必要事項を記録する (b)。
- ② 記録された必要事項を精査しつつ「資料一覧」を作成する。また精査に必要な情報を得るため、当該期東本願寺発行の機関誌『宗報』などによって、人事異動・布教所開設などに関する記事を整理する (a)。
- ③ 作成された「史料一覧（原案）」と対比し、内

容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする (b)。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブ構築

室長・准教授 松浦 典弘
(東洋史学)

本学に所蔵された多くの貴重な文献資料を半永久的に保存し活用していくため、資料をデジタル・アーカイブ化し、分類整理・保存する作業を引き続き進めていく。

2010年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2016年度には約2,250件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

また、大谷大学の学内学会による様々な学術刊行物をデジタル化して公開する課題について、デジタル化自体については概ね合意を得ることができているため、今後鋭意進めていくことになるであろう。但し、公開に関しては、慎重な意見が多く、当面は非公開とする見込みである。

SAT

大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT) 現代語訳研究

研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、東京大学の下田正弘教授を議長とする大蔵経研究推進会議を中心に進化発展を続けている大正新脩大蔵経テキストデータベース (SAT) に新たに現代日本語訳データを付加していく事業に対して、大谷大学から協力するための研究会として2016年度初めに発足した。事業が本格化する前の試験的な現代日本語訳として、2016年度は『歎異抄』(大正蔵No.2661)を3名からなる大谷大学SAT現代語訳チームが担当した。具体的には、仏教伝道協会の英訳大蔵経 (BDK English Tripiṭaka) 所収の坂東性純先生とハロルド・スチュワートによる『歎異抄』英訳 (Shōjun Bandō, Harold Stewart, trans., *Tannishō: Passages Deploring Deviations of Faith*) を、「中学生でも理解できる平易な現代日本語に翻訳する」という方針で英文テキストの和訳を進めた。まず真宗学科の修士課程第一学年の

和田良世と博士後期課程第三学年の東真行 (所属はいずれも当時) が分担して少しずつ下訳を準備し、真宗学科教員 (井上) を加えた3名で定期的に研究会を開いて訳語・訳文について検討して確定して行く形で勧めた。年間で17回の研究会を実施し、最終的に英訳『歎異抄』からの現代日本語訳を完成してSAT事務局に提出した。

仏教聖典 (主として漢訳経典) をその英訳から現代日本語に翻訳する目的は、仏教語を出来る限り平易な日本語にすることにあるものと思われるが、原文が日本語古文の『歎異抄』の場合には、英文として自然に読めるように英訳されているものを忠実に和訳しても、日本語として分かり易く自然な表現になるとは限らない。かえって古文の原文からは離れてしまう場合があり、一貫した方針で現代語訳することは困難であった。今後、大正大蔵経所収の他の真宗関係文献についてもBDK English Tripiṭaka からの現代日本語訳というかたちで事業が継続する場合には、改めて英訳から日本語訳するという方法について、その意図と方針を明確にする必要がある。

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／形成に ついての総合的研究

—哲学的・宗教学的・人類学的視点から—

研究代表者・名誉教授 池上 哲司
(哲学・倫理学)

本研究は、宗教において語られる言葉が現実生きるわれわれにとってどのような働きをもたらすかを、多様な観点から明らかにしようとするものである。以下に、本年度の主な活動を記す。

1. 共同研究発表

各研究員が自らの研究課題を宗教的言語という観点から発表し、それを他の分野の視点から議論・批判するというゼミナール形式の研究会を15回ほど行った。その際、発表者には他分野の者にも理解可能な説明をすることが要求された。

2. 各研究員の活動

●松澤研究員

マイスター・エックハルトのドイツ語説教における言説をラテン語著作における言説と比較しながら、ドイツ語説教における「言葉」の特性について研究を進

めている。2016年6月にはドイツに出張し、テュービンゲン大学神学部図書館においてエックハルト・エリウゲナ関連文献に関する調査を行った。また、2017年2月には韓国外国語大学から招待を受け、仏教とエックハルトにおける自己認識についての講演を行った。

●田崎研究員

聖書の翻訳に伴う現地語彙とのずれや解釈の齟齬によって生じる問題やローカル社会の再編について、関連する先行研究を整理・検討した。夏期にはタイとミャンマーへ長期調査に出かけ、キリスト教の世俗的役割に関するフィールド調査を行い、また教会や神学校で聖書の翻訳や言葉遣いに関する資料を収集した。

●藤原研究員

清沢満之において、彼の言う「自己の信念の確立」の上に「その信仰を他に伝える」ということが、どのような発言として現れたのかについて考察を進めた。特に、当時の社会状況や知識人の発言に対して、清沢がどのような点に着目して応答しようとしているのかを検討した。

3. 海外調査（松澤・田崎・藤原研究員）

2017年2月15日-28日：タイ

チェンマイを拠点とする。宗教によって日常生活が大きく異なるカレン村落でフィールド調査を行い、特にプロテスタント・キリスト教と仏教や精霊信仰の信徒の日常生活の差異について、現地で用いられるカレン語表現を調査。また、社会参加仏教とも称されるタイの仏教が地域共同体の日常生活の中で様々な役割を担っている様子について、参与観察を行った。

4. 公開研究会の開催

第1回「宗教と人間」研究会

テーマ「柳宗悦と宗教」

日程：2017年2月11日19時～21時

会場：親鸞仏教センター3F仏間

講師：若松英輔氏（批評家）、大沢啓徳氏（早稲田大学非常勤講師）

第2回「宗教と人間」研究会

テーマ「台湾原住民族アミとカトリック信仰」

日程：2017年3月29日16時～18時

会場：親鸞仏教センター5Fセミナー室

講師：岡田紅理子氏（上智大学大学院・博士課程）

2017(平成29)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(追加)

■ 指定研究「国際仏教研究」嘱託研究員の追加

(2017年10月1日付)

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開
	研究代表者	井上尚実
	研究員	井上尚実 (短期大学部教授・真宗学) Robert F. Rhodes (教授・仏教学) 新田智通 (講師・仏教学) Michael J. Conway (講師・真宗学) 井黒忍 (准教授・東洋史学)
	嘱託研究員	Michael Pye (マールブルク大学名誉教授) James C. Dobbins (オーバーリン大学教授) Mark L. Blum (カリフォルニア大学バークレー校教授) Paul Watt (早稲田大学留学センター教授) 下田正弘 (東京大学教授) 【追加】 Galen Amstutz (仏教大学院大学 (IBS) 非常勤講師) Max Deeg (ウェールズ大学カーディフ校教授) Thomas P. Kasulis (オハイオ大学名誉教授) 羽田信生 (毎田周一センター所長) 阿満道尋 (モンタナ大学准教授) Wayne S. Yokoyama (花園大学元講師)
	研究補助員(RA)	梶哲也 (博士後期課程第3学年)
	研究補助員(RA)	常塚勇哲 (博士後期課程第1学年)

■ 科研費採択に伴う一般研究班の発足

(2017年6月30日付)

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2017～2019年度「科研費」採択】 一般研究(翁班)	研究課題	認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開―「主体」論を超えて
	研究代表者	翁和美 (任期制助教・特別研究員)

■ 協同研究員の新規委嘱に伴う研究組織の変更

【共同研究】

(2017年4月1日付)

研究名等	研究課題及び研究組織	
【2016～2018年度「科研費」採択】 一般研究(徳田班)	研究課題	人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究
	研究代表者	徳田剛 (准教授・地域社会学)
	協同研究員	梅村麦生 (日本学術振興会特別研究員-PD) 【新規】

※協同研究員の新規委嘱に伴い、一般研究徳田班は個人研究から共同研究に変更

2017(平成29)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介

個人研究

「世界文学研究」の方法論構築 —サン＝テグジュペリ『星の王子さま』 研究を通じて

研究代表者・准教授 藤田 義孝
(フランス文学)

研究の最終目的は、アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』(1943)を適正に評価し位置づけるため、文学作品はどのように流通し受容されて「世界文学」に至るのかを明らかにし、「世界文学研究」のための理論的枠組を構築することである。

そのため、予備研究では「世界文学」成立に関する作業仮説を用意し、『星の王子さま』の受容と流通に関する調査研究を通じてその有効性を検証する。つまり、『星の王子さま』が「世界文学」となりえたのは英語版が英語圏文学市場において成功したためであり、仏語版の受容と流通は二次的な役割しか果たさなかった」という仮説に基づき、『星の王子さま』の受容と流通についてフランス語圏を中心に、可能な範囲で英語圏と日本も視野に入れながら一年間で調査・研究する計画である。

調査の出発点として、パリのフランス国立図書館(BnF)に資料収集に赴き、『星の王子さま』出版以降のフランス語(および調べがつく範囲で英語)の書評や新聞記事、評論などを調査することで、主にフランス語圏において作品がどのように受容されたのかを明らかにする。また、日本では岩波書店の『星の王子さま』日本語版がどのように受容され流通したのかを調査し、フランス語版(および可能であれば英語版)の場合と比較しつつ、時代ごとに整理する。そうすることで、いつ、どのような共通の理由、または個別的な理由によって作品の流通が増大し、「世界文学」といえる規模に到達したのかを跡付ける。

以上のような研究を通じて、後の科研費申請研究の柱となる二つの作業仮説、すなわち「今日の世界文学の条件は、英語圏文学市場への進出とそこでの成功である」こと、および「文学作品が複数の文化圏で受容され評価される場合、普遍的な共通の理由と、文化圏ごとの個別的・歴史的の理由の二種類が存在する」こと、以上の二点を検証することを予備研究の目的とする。

個人研究

認知症患者との「関係性」に ついての新モデルの構築と展開 —「主体」論を超えて

研究代表者・任期制助教 翁 和美
(社会学・文化人類学)

本研究の目的は、「主体」論の本場でありながら、その内部で「相互了解世界」アプローチが評価されつつあるオランダでの調査を実施することで、「主体」論から「相互了解世界」へ介護モデルを刷新する道筋を示すことにある。

認知症患者に対する従来の介護論も、それを乗り越える形で登場した「新しい介護」論も、ともに「主体」を前提とする点、および「理論」を「実践」に適用する点において問題がある。研究代表者は、「主体」ではなく、専門家と患者の「関係性」に着目し、「実践」から「理論」を構築するという、新しいモデルである「相互了解世界」を構築した(『認知症患者と「わかり合える」という「相互了解世界」の創出：医療空間に接ぎ木された「日常生活世界」実践から』京都大学大学院文学研究科社会学博士論文、2013)。それは、起点に患者の自己や自我の表現を想定しなくとも(一方向的「関係性」)、専門家が、患者の受容や理解に向かい、患者と「わかり合える」双方向的「関係性」を築くことができるアプローチである。

ただし、応募者がそれを見出した日本での実践は、その意義や有効性が十分に理解されていない。それに対して、日本よりも早くに日本以上に体系的に「主体」論に基づく「新しい介護」を実現するオランダで、そのパイオニアの実践の意義や有効性が高く評価され始めている。海外の団体だけでなく、オランダ内のさまざまな団体から賞を受ける一方で、近年は学術研究も始まっている。そこで本研究は、「主体」論の本場でありながらその内部で「相互了解世界」アプローチが実践され評価されつつあるオランダでの調査を実施することで、「主体」論から「相互了解世界」へ介護モデルを刷新する道筋を示す。

このアプローチは専門家と患者との「関係性」においてだけでなく、患者の家族も含めた一般市民と患者にも適用可能であり、超高齢社会の喫緊の課題に対して一つの可能性を示すものである。

2016(平成28)年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

スティラマティの俱舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授 小谷 信千代
(仏教学)

本研究は、ヴァスバンドゥの『俱舎論』に対するインド撰述注釈文献のうち、最も大部にして最も詳細な注釈である、スティラマティ(安慧)の『真実義』サンスクリット写本の解読を目的とする。研究の手順として、研究代表者である小谷がサンスクリットテキストとその試訳を準備したうえで、大谷大学にて定期的に研究会を開催し、研究分担者と共同で検討することを繰り返すというかたちで、解読研究を遂行した。さらに本研究は、各年度に6葉ずつの解読を目指す研究計画に基づいて遂行されており、本年度は『俱舎論』冒頭の序偈に対する注釈箇所を解読を試み、サンスクリットテキストを確定した上で、試訳を完成させた。

またそれらの作業と並行して、サンスクリット文献ではスティラマティの『中辺分別論釈疏』『五蘊論釈』やヤショーミトラの『俱舎論釈』との平行句を、チベット語訳文献ではプールナヴァルダナの『俱舎論注』との平行句を同定した。そして何より、漢語でしか現存しないとされてきたサンガバドラの『順正理論』のサンスクリット文、並びにこれまでいかなる資料からも回収しえなかった有部阿含の経文を回収することができた。

従来の研究において、スティラマティという人物は、ヴァスバンドゥの著作群に対する一注釈家としてのみ捉えられてきた。しかし本研究により、スティラマティ自身の背景の一端が少しずつ明らかになりつつある。具体的には、(1)『順正理論』の文脈を精密に捉えながら、スティラマティが『俱舎論』の注釈書を著した事実を窺い知ることが可能である。(2) またアビダルマ教義学に着目すれば、チベット文のみでは確定困難であった議論の脈絡を丹念に辿り、いくつかの点において議論の展開を明確にすることが可能である。というのもスティラマティによる注釈内容は、インド撰述のいかなる『俱舎論』注釈書より詳しく、より大部だからである。この点はスティラマティの力量を伺い知るに充分であり、『真実義』が最重要の注釈書と目される由縁である。

共同研究

モンゴル国カラコルム博物館における歴史研究を基軸とした情報化と国際協働の推進

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

本研究は、諸外国との国際的協働によってモンゴル国カラコルム博物館収蔵の考古歴史遺物の研究を推進するとともに、同博物館の高度情報化をめざし、研究成果を情報展示によって地域に還元し、博物館を核とした地域振興策を新たに提案することを研究目的としており、最終年度に当たる2016年度には、研究計画の最終段階として、現地シンポジウムの開催と報告書の作成を行った。協同研究員の清水は5月10日にカラコルム博物館にて「[住民の知]発見のためのワークショップ」を開催し、7月29日～8月29日までカラコルム博物館にて「ハラホリンの文化遺産展」の開催を企画した。これらの成果は現地テレビ局制作の「ハラホリンの文化遺産」(第1回)として2017年2月26日に放映された。

これらの研究成果は雑誌『オルホン渓谷遺産』第4号としてモンゴル国で刊行され、清水奈都紀(他)著「文化財の保護利用における現地住民参加と地域振興システムの研究」(pp.93-104)が掲載された。

本研究計画の当初の4つの柱の成果は以下のとおりである。<国際共同研究>2020年にカラコルム建都800周年を迎えるに当たって、最重要な史料『1347年漢モ合壁碑文』の再構とレプリカ制作のための国際共同研究体制の基盤を構築し得たこと。<情報展示の導入>カラコルム博物館においてタブレット型端末を利用したマルチメディア博物館ガイドシステム導入の可能性を検証し得たこと。<文化財保存科学的研究>カラコルム博物館における文化財の収蔵と保存保護方法について、専門の見地から実効的な提案を行ったこと。<官民学連携による地域振興研究>モンゴル国地方政府、地域住民と共に地域振興ワークショップを開催し、博物館の高度情報化による地域振興施策に地域住民の意見を反映させるシステムを構築できたこと。

共同研究

紋章との比較による系譜の
図像化規則とその構造分析

研究代表者・教授 柴田 みゆき
(情報処理学)

本研究班の活動は、(1) 西洋の紋章に関する調査、(2) 日本の系図に関する調査、(3) それらのデータが揃った暁に実際にPCを利用して表示する表示手法の検討、の三種類に大別される。2016年度の活動は、(1)と(3)については情報処理学会第79回全国大会において報告を行うことで国民への研究成果公開とした。以下に、その概略を述べる。

西洋の紋章に関する調査については、情報解析にあたり画像解析に加えテキスト解析を補助的に利用するアプローチを提唱した。紋章情報をデータベース化して検索可能にする際、現在の画像解析に基づいたアプローチのみでは有用な情報へ十分に遡及することができない。かつて画像からの検索システムも複数試みられたが発展に至っていない。本研究では、紋章のデータベース化に向けて画像解析にあわせてテキスト解析結果も加えることの重要性を提示し、テキスト解析に基づくメタ情報の分類を試みた。

PCを利用しての系図表示手法に関する調査については、系図情報の異説表示の実装に関する研究と報告を行った。すでに第一歩として、異なる情報を持つ系譜を系図上に同時表示するにあたっての問題点を整理検討してきた。しかし、異説表示のデータ構造に関してはまだ議論ができていない。また、系図情報のデータ様式の事実上の標準となっているGEDCOMでも、系譜の異説をデータとして持つことはできない。異説表示については、今後も議論を継続する。

日本の系図調査については、円形系図の調査を中心に行った。円形系図は江戸時代以降にみられる形式であるが、その成立の背景や配置規則に関する文献は極めて稀で、十分な学術的検討がなされているとは言い難い。そこで、国立国会図書館、東京国立博物館、文京ふるさと歴史館に出張し、データ収集にあたった。

共同研究

アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究

研究代表者・准教授 武田 和哉
(人文情報学)

本研究は、東アジアの米主食文化では中心的副食として食されてきたアブラナ科植物について、いつ頃から日本列島に伝播・受容され、どのように栽培が広まったのか、またその栽培技法や食文化などの諸問題に関して、農学系・人文学系の研究者の協業により実施するものである。歴史・考古学などの資史料や、品種の遺伝学的背景や成果等を融合させた総合的研究を目指しており、日本国内やアジア各地において、関連する国際条約や国内法等に留意しつつ、各地における栽培形態・食用文化・利用方法や関係技術等を対象に含めた各種の調査を行っていく予定にしている。

発足3年目となった2016年度は、まず4月に文系研究者の打ち合わせを真宗総合研究所にて、5月に成果物刊行に関する打ち合わせを東京と仙台にて、それぞれ行った。次いで6月には昨年に引き続き中国雲南省内での現地調査活動を、さらに8月には一昨年に引き続き中国甘粛省内での調査を、それぞれ実施した。さらには、本研究では初めての対象地域となるミャンマー国内での調査を計画し、10月には同国での渡航・調査経験者をお招きして検討会議を行い、1月に現地での調査を実施することができた。

これらの調査活動を踏まえて、例年の通り2月に成果報告会と検討会議を開催したが、初日は京都大学農学部附属農場を会場として、同場との共催で成果報告会を開催し、同場の研究者とも交流を深めた。翌日は、奈良市内で成果検討総括会議を行い、今年度の調査成果等の共有と、成果取りまとめについての打ち合わせ、そして今後の活動方針に関する議論等を行った。

以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

4月9日

成果とりまとめに関する文系研究者打ち合わせ(真宗総合研究所)

5月18日～20日

成果物刊行に関する打ち合わせ(東京都千代田区・東北大学大学院生命科学研究所)

6月26日～7月3日

中国国内調査(雲南省昆明市・麗江市ほか)

8月20日～8月28日

中国国内調査(甘肅省蘭州市・武威市ほか)

10月13日～15日

東南アジア方面調査の準備検討会議(真宗総合研究所)

1月3日～1月10日

ミャンマー連邦共和国内調査(ヤンゴン市・マンガレー管区・バゴ管区ほか)

2月20日～22日

2016年度研究成果報告会(公開)・成果検討総括会議(20日:京都大学農学部附属農場(京都府木津川市)・21日奈良県文化会館(奈良県奈良市))

共同研究

文化地質学：人と地質学の接点を求めて

研究代表者・教授 鈴木 寿志
(地質学)

文化地質学の科研費(挑戦的萌芽研究)は2年目を迎えた。2016年度は、6月11日に東京地学協会主催の春季特別公開講演会において4件の普及講演会を催し、また9月11日には日本地質学会第123年学術大会にて13件の発表を含むセッションを開催した。また月刊地球誌(号外66号)にて巻頭言・総論3篇および研究論文15篇を含む文化地質学の特集号を編集し出版した。

研究代表者は上記の活動を通じて科研費研究を推進するとともに、真宗総合研究所の研究課題として5名からなる共同研究を組織した。以下に各研究者の研究成果概要を示す。

南薩摩の焼酎蔵立地 [鈴木寿志]: 薩摩半島南部の4件の焼酎蔵を訪れ、それぞれの立地状況を調べた。創業地で稼働している醸造所では、シラス台地崖下の軟水湧水が今でも利用されており、焼酎蔵と台地縁辺湧水との密接な関係が確認された。

花崗岩の利用と文化 [長 秋雄]: 古代常陸国の国衙があった石岡市を対象に石材利用について文献調査と現地調査を行った。常陸国分寺跡の礎石は、帯磁率の対比から、八郷盆地北部の大足山付近の産と考えられた。

ドイツ文学と地質学 [廣川智貴]: E・T・A・ホフマンの『ファールンの鉱山』では、主人公の自我が意識と無意識の世界をそれぞれ象徴する、地上と地下(鉱山)の間で引き裂かれる。それはエディプス・コンプ

レックスをめぐる物語でもあるが、鉱物アルマンディンを女性象徴とすることで効果的に描かれていることを指摘した。

仏教と地質 [清水洋平]: タイ国寺院の布薩堂にある「結界石」について現地調査を実施し、その特徴を把握することに努めた。次に、日本仏教における「結界石」がもつ「界」の概念が、初期の仏教と大きく異なることを確認し、それに合わせて日本の寺院に見られる「結界石」が果たしている役割も、本来的な意味合いと異なっていることを確認した。

弘法大師伝説と地質 [石橋弘明]: 和歌山県串本町の橋杭岩伝説、岐阜県高山市の材木石伝説、および栃木県那須塩原市の材木岩伝説について現地調査を行うとともに、それらの伝説に共通する部分(天邪鬼の登場など)を考察した。

共同研究

ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

研究代表者・准教授 上田 敏樹
(情報工学)

研究課題「ウェアラブル端末を用いた大学の学習意欲喚起のための研究」(JSPS科研費16K00495)では、学生が装着したウェアラブル端末やスマートフォンから得られたバイタルデータ(心拍数、睡眠データなど)やライフログ(移動距離、手段)と学生の身体状態およびMoodleアクセスにより得られた学習履歴との相関関係を見出すことを主目的とする。また、その解析結果を学生が持つタブレット端末やスマートフォンにリアルタイムにフィードバックすることにより、学生をより望ましい学習状態へ遷移させる方策についても研究する。

初年度では複数の学生のバイタルデータやライフログを統合的に解析するWebアプリをRstudioのShinyサーバ上に構築した。いずれのデータもfitbit、movesアプリにより各個人での利用は可能である。しかし、本Webアプリにおいては複数の研究協力者のデータを一つのサイトで一括して把握、処理したところに独自性がある。

①ウェアラブル端末(fitbit)からスマートフォン(iPhone、Android)を介してアップロードされた生体データをShinyサーバから取得する。

②スマートフォンアプリ(moves)からアップロー

ドされたライフログを Shinyサーバから取得する。

- ③これら身体状態や行動履歴データを Shinyによる Web アプリにより可視化する。
- ④歩数と睡眠時間については解析のために、平均値、標準偏差と変動係数を表示する。

これらの研究成果については、次の通り国際学会等において発表した。

1. ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究 (2016-09-08) 私情協：教育改革ICT戦略大会
2. Stimulation Methods for Students' Studies using Wearable Technology (2016-11-24) IEEE TENCON Singapore
3. IoT時代におけるウェアラブル端末と学習支援システムのシナジー (2016-12-17) 大谷大学人文情報学科主催「人文情報学研究の最前線2016」
4. Shinyサーバとスマートフォンアプリを使った生体情報収集システムの構築 (2017-03-16) 情報処理学会第79回全国大会
5. スマートフォンアプリと Shinyサーバによる生体データ収集 Web アプリの構築 (2017-03-22) 電子情報通信学会2017年総合大会

共同研究

モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究

研究代表者・教授 松川 節
(モンゴル学)

本研究は、1)「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産の研究基盤を構築し、世界遺産富士山との比較研究を行った上で、2) 周辺のベレーヴェン寺院・アラシャーンハダ遺蹟の調査・研究と、それらの世界遺産登録のための実効的提言を行い、3) 結果としてもたらされる新たな知見に基づき、モンゴル宗教文化史を再構築することをめざすものである。

初年度にあたる今年度は2回の国内研究会(5/14、11/25)を大谷大学で開催し、2回目に合わせて研究協力者のB. ツォクトバートル、B. ハシマルガド、S. スレンハンダ、N. ナランゲレルをそれぞれ招聘した。また研究代表者の松川は、4/28～5/8、6/22～6/27、8/7～8/21、1/3～1/9、2/11～2/18、3/9～3/14、3/25～3/30にそれぞれモンゴル国に調査・研究出張をした。このうち8/10～8/14の日程

で、大ブルカン・カルドゥン山周辺、ベレーヴェン寺院、アラシャーンハダ遺蹟の現地調査を行い、松川・藤井麻湖・二神葉子・山口欧志・ツォクトバートル・ハシマルガド・サロールポイン・アムガランが参加した。

2回の研究会と現地調査により、本研究課題のうち、さしあたって、(1) 大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観における考古・歴史遺物に関するデータの蒐集とデータベース化に関連する文書館資料集の公刊、(2) 該当地域の保存保護に向けた法整備とマネジメントプランの策定、以上が差し迫った課題であるという点で日本側とモンゴル側が共通認識を持つに至った。

個人研究

移行期正義の社会的影響に関する比較社会学的研究

研究代表者・教授 阿部 利洋
(社会学)

体制転換後または武力紛争終結後の社会では、その社会再構築の重要課題として過去の不正あるいは加害・被害関係に公的に対応する必要に迫られる。これまでおよそ30年に渡る国際的な取り組みの中で移行期正義(transitional justice=TJ)というカテゴリーが確立してきた。しかし、その実施に伴うさまざまな問題点は、依然として十分に把握されていない。本研究では、社会学的な観点からこうした問題点を分析することを目的とした。2016年度は、南アフリカおよびカンボジアで、ポストTJの社会状況という観点から現地調査を行った。

研究期間を通じて明確になったことは、(1) TJの分析は移行期社会の条件を反映させる形で行う必要があるということ、結果として(2) TJの分析が当該移行期社会の分析になるという認識である。この点に関して、本研究の調査を通じて、従来「TJの失敗」と評されてきた現実と並行して、ローカル社会の直接・間接のアクターが、比較的自律的な活動を、場合によってはTJプログラムの不十分な遂行を補足するかのよう展開させる実態が頻繁に確認されるという事実が明らかになった。これは、TJプログラムの成否に視野を絞っていると認識の対象外とされる事例であるが、移行期社会という枠組みから位置づけることで、その性格を同定できるようになる。本研究では、こうした「TJの意図せざる結果」を比較社会学的な観点

から把握し、かつ今後のTJプロジェクトの分析に応用しうる知見として提示することができた。

(論文等)

1. 阿部利洋、2017、「解決よりも触発を——不透明な時代の社会学」『大谷学報』96(1): 41-59. 査読無
2. Abe, Toshihiro and Obvious Katsaura, 2016, Social Cohesion against Xenophobic Tension: A Case Study of Yeoville, Johannesburg, *African Study Monographs* 37(2): 55-73.
3. 阿部利洋、2016、「過去に触れつつ遠ざける——移行期正義における記憶表象」『時間学研究』10: 1-20.
4. 阿部利洋、2016「想像の共同体」、西村大志・松浦雄介共編『映画は社会学する』、208-218

個人研究

ハンス・リップス解釈学におけるパトスを基盤とした知識教授理論の研究

研究代表者・准教授 田中 潤一
(教育学・教育哲学)

ドイツの哲学者ハンス・リップスの解釈学的論理学の研究を、下記の2方面から行った。(1) 解釈学における論理学と知識論の理論的研究、(2) 解釈学を基盤とした教授理論研究。

まず知識の成立構造の解明について、知識成立と対話の関係性を考察した。リップスが「歩みの類型学」を主張していることに着目し、伝統的論理学のテーゼを他者理解の文脈から構成し直した。次に「比較」という方法論を考察した。人が「物」を把握するとき、「類型」によってのみとらえることができること、そして「物」には「知らせるもの」が存していることを論じた。最後に「物」が「音」となることによって、知識が生成する意義を考察した。また教授理論研究では、特に道徳科の授業における「メタファー」型指導法について探究した。とりわけ「モリソン・プラン」の5教授段階論と関連付け、①Inquiring、②Presentation、③Assimilation、④Organization、⑤Recitationの段階において、児童生徒が自ら道徳的価値を生み出していくプロセスを考察した。

研究業績は、(1) に関しては、研究論文2本、学会発表2回。研究論文「ハンス・リップスにおける論理

生成と対話の問題」(『ディルタイ研究』27号、2016年11月30日)、「解釈学的論理学における方法としての「比較」- 「物」、「音」、そして「論理」へ-」(『人間形成論研究』第7号、2017年3月1日 [査読有])。学会発表「ハンス・リップスにおける論理生成と対話の問題」(日本ディルタイ協会関西研究会、於：大阪教育大学、2016年7月2日)、「生の力動性と認識の形成- 解釈学的論理学の成立過程の一考察-」(第13回ニーチェ研究者の集い、於：大阪大学、2016年9月17日)。(2) に関しては海外学会発表1回。学会発表“The Theory of Moral Education and Problem of “Metaphor Model” in Japan” (Pacific Circle Consortium 40th (環太平洋コンソーシアム 第40回大会) 於：アメリカ合衆国自治領北マリアナ諸島連邦自治区サイパン、2016年7月7日)。

個人研究

初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究課題は、チベット仏教後伝期にどのようにしてチベット論理学が形成されていったかを研究するための基礎資料を提供することを目的としている。特に2008年以降に出版された新出のカダム派文献に多数の論理学書が含まれていたが、これらは単にテキストが草書体で書かれていて難解であるばかりでなく、内容も後代のチベット論理学とは大きく異なり、議論を追い掛けていくのも困難である。そこで本研究課題ではまず初期のチベット論理学書をコンピュータ入力し、読みやすいテキストを作成し、さらに横断的な単語検索(KWIC検索)機能を提供するWebサイトを公開した。また科段抽出の基礎的研究を行った。カダム全書90巻に含まれる論理学関係と考えられる26点のテキストのうち、規模の大きいものから順次入力し、2016年度は、以下の3点の入力を行った。これまでに入力したテキストも含め16点のKWIC検索をWeb上で提供している。

1. チュミクパ・センゲル 『量決訳注』
2. チョンデンリクレル 『Vādanyāya註』
3. 著者不明 『量評釈註』

他にカダム全集に含まれないが、ごく初期の論理学書と考えられるロンチェン・ラブジャムバに帰せられ

る『量・真実綱要』やカダム派の論理学を学んだのち、インド最後の論理学も学んだサキャ派のサキャパండిタの『量・正理の蔵』、初期ゲルク派のタルマリンチェンの『量評釈註』も検索対象に含まれる。これら初期チベット論理学の多くの文献において用例の検索ができることで、難解で特殊な用語の意味を帰納的に推測することができるようになった。

他に研究成果として、研究代表者・研究分担者・研究協力者が各自のテーマに従い論文執筆あるいは研究発表を行った。

個人研究

前近代中国黄河中流域における水利権と水利組織

研究代表者・准教授 井黒 忍
(東洋史学)

本研究の目的は、15～19世紀の中国黄河中流域（陝西省東部・山西省南部・河南省西部）において、1) 水利権がいかに認識され、売買・貸借などの契約関係の中でどのように取り扱われたのか、2) 民間の水利組織がどのように成立し、水資源の管理・分配および水利権移転にいかなる役割を果たしたのかの二点を明らかにした上で、3) 異なる地域間の比較を通して、資源管理システムとしての持続性の差異とそれぞれの歴史的意義を評価することである。

2016年度の研究内容としては、2016年5月26日(木)から28日(土)にかけて嶺南大学および香港大学にて開催された“Empires of Water: Water Management and Politics in the Arid Regions of China, Central Eurasia and the Middle East (16th-20th centuries)”に参加し、中国西部、中央アジア、エジプトにおける水利と政策に関する報告に対してコメントを行った。

また、2016年9月24日(土)から9月25日(日)に中国北京市にて開催された“銘刻文献所見古代法律和社会”学術研討会において研究発表「旧章再造：以山西曲沃县“一石三記”与“三石一記”水利碑为中心材料」を行い、さらに2016年12月3日(土)から12月4日(日)に中国山西省太原市にて開催された第二回中国人口資源環境与社会変遷学術研討会において研究発表「旧章再造：以增刻、重刻の水利碑为基础資料」を行った。いずれもその内容は水利に関わる碑刻がいかに作成され、さらにそれが時代の変化の中でいかなる変化をたどったのかを考察したものである。

これら研究発表と並行して、2016年9月14日(木)から9月22日(木)にかけて河南西部における水利碑の現地調査を行い、さらに2016年12月5日(月)には山西省曲沃県において水利碑の現地調査を行った。これら現地調査を通して、新たな水利碑を発見し記録するとともに、従来の資料集などに収録された文章の誤りを訂正するなど、有意義な成果を得ることができた。

個人研究

口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究

研究代表者・特別研究員 西沢 史仁
(仏教学・チベット学)

2016年度は、前年度に引き続き、チベット古文書研究会を主催し、同研究会において、『チャンキヤ教義書』帰謬派章の講読と、サンブ寺ニマタン学堂シェーラブジンバ著『中観学説決択集』の講読及び写本研究を平行して行った。同研究会は、真宗総合研究所において、六回（2016/5/30-6/2; 7/4-8; 7/19-22; 12/20-22; 1/18-20; 3/13-15）にわたり、集中的に開催して、『チャンキヤ教義書』(ICang skya grub mtha') 帰謬派章（蔵学出版社本 pp. 281-364）の全体を講読し、併せて、その全訳を完成した。さらには、その思想的背景を解明する一助として、ツォンカバの『了義未了義弁別論・善説真髓』(Drang nges rnam 'byed legs bshad snying po) の中観派章の講読とその訳出作業を開始した。

他方、『中観学説決択集』からは、特に、『二諦精解』(bDen gnyis mtha' dpyod) の講読及び訳出作業に従事した。

『チャンキヤ教義書』の解説に際しては、前述の『善説真髓』の他にも、チャパ・チューキセンゲの『中観東方三論提要』、『善逝と外教徒の学説弁別』、『二諦分別論註』、ケードゥブジェの『提要大論』、セラジェツウンパ、パンチェンソナムタクパ、ジャムヤンシェーバ等の中観論書や教義書文献を参考資料として、『チャンキヤ教義書』の思想的背景を解明する作業を継続した。

その研究成果の一部は、ノルウェーのベルゲン大学で開催された第十四回国際チベット学会 (IATS)、及び、東京大学で開催された日本印度学仏教会第67回学術大会において発表を行い、前者の発表内容は、『インド論理学研究』9 (2016/11) において、“A Reconsideration on a Perception and an Object-

ascertaining cognition: Dhamarkirti's Inconsistent Accounts and the Interpretations of his Followers in India and Tibet”という題目で、後者のそれは、『印仏研』65-2 (2017/3) において、「中観帰謬派の開祖について」という題目で掲載された。

個人研究

ハイデッガー「黒ノート」の研究 —「計算的思考」の分析を中心に

研究代表者・特別研究員 田鍋 良臣
(宗教哲学)

本研究の目的は、2014年春に刊行が始まったハイデッガーの遺稿「黒ノート」を、ハイデッガーの思想動向のうちに位置づけることで、「反ユダヤ主義」には限定されない「黒ノート」の解釈可能性を提起することである。2015年度は「計算的思考」という概念に注目して「黒ノート」を分析し、ハイデッガーの依拠する神（最後の神、既在の神々）とユダヤキリスト教の神（唯一神）とが計算可能性の問題をめぐる対置されていることを明らかにした。これを踏まえて2016年度は、「黒ノート」で語られたユダヤキリスト教批判の解明に取り組んだが、とりわけ信仰と思索、宗教と哲学との関係に注目することで、以下の2点を明らかにした（田鍋良臣「ハイデッガーにおける信仰と思索——「黒ノート」を中心に」日本宗教学会第75回学術大会、2016年9月、於早稲田大学）。①ハイデッガーは信仰と思索との間に（厳密には信仰に対する思索のかかわり方に）「裂目」を指摘し、そのなかで信仰と思索は「相互承認」という独特な関係にあると考えている。②「黒ノート」に特徴的なキリスト教（神学）批判には、存在の思索による間接的な信仰擁護の可能性が認められる。さらにこれらの問題には、従来知られていなかったハイデッガーのパスカル解釈が関係しており、この点についても主に以下の2点を明らかにした（田鍋良臣「ハイデッガーのパスカル論——「黒ノート」に依拠して」『大谷學報』第96巻第2号、2017年4月、1-22頁）。①ハイデッガーはパスカルの思想を、信仰による近代主義的な世界観の基礎づけ（ないし補完）と評価する一方で、そこに決定的な「存在忘却」を指摘する。②しかしパスカルの「心情の論理」と「理性の論理」の区別には、存在の思索にかかわる「ある本質的な痕跡の予感」が認められる。今後は、これらの宗教-哲学的な論点が現在物議を醸している

ユダヤ論にどうかかわっているのかについて、引き続き研究を進めて行く。

個人研究

シュティフターとシュトルムの 文学における「障がい児」像

研究代表者・任期制講師 藤原 美沙
(ドイツ文学)

本研究（科研費研究活動スタート支援2015～2016年度）の最終年度にあたる2016年度の研究成果は以下のとおりである。まず、前年度の阪神ドイツ文学会第219回研究発表会で行った口頭発表の質疑応答をふまえて、シュティフターの『電気石』（1853）に関する考察を深めると同時に、シュティフターハウスで調査収集した資料を読み込み、論拠として論文内に組み込んだ。その結果、本作中の少女が「障がい」を抱えていることにより、ロマン主義的「子ども」像が歪んだかたちで再創出されているだけでなく、ロマン主義的「子ども」像と、現実社会における理想の「子ども」像が交錯することなく混在し、その歪みが少女の「障がい」として眼前に提示されていることを明らかにした。成果報告として、2016年7月発行の大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』に論文を掲載した。

次に、2016年10月の日本独文学会秋季研究大会シンポジウムにおいて、シュティフターの『アプディアス』（1842）における少女の視覚障がいについて、シンポジウムのテーマである〈かけがえのなさ〉の形成と結びつけて論じた。シンポジウムでの発表は、すでに論文としてまとめ、2017年9月刊行の日本独文学会研究叢書に収録されている。

調査成果としては、2016年8月に訪れたドイツ・ペーレフェルトのベートルとフーズムのシュトルム・アルヒーフを挙げるができる。前者においては精神疾患についてのドイツ国内における認識の変遷や、療育方法の変遷の歴史を調査することで、治療対象としての精神疾患が社会的に認知されていく過程を確認した。後者では、シュトルムの『白馬の騎手』（1888）に登場する精神遅滞児ヴィーンケ描写を医学的見地から論じる文献を入手することができた。シュトルム文学における「障がい児」像に関しては、上記の『アプディアス』を急遽研究計画に入れたために遅れが生じたが、2017年12月に日本シュトルム協会での口頭発表が決定している。

個人研究

キリスト教聖書の翻訳に見られる現地語語彙の選択とローカル社会の再編

研究代表者・PD 研究員 田崎 郁子
(文化人類学)

タイとミャンマーに居住するカレンと呼ばれる少数民族を事例に、①プロテスタント・キリスト教の受容とそれに伴う社会の変容について、また②山地の生業変容と民族表象との関連について、文化人類学的な視点から研究した。

一般研究としては、学会発表1件、論文1本の執筆を行い、国内の学会や国際学会、研究会へ出席し、またタイとミャンマーでの渡航調査を行った。学会発表では、カレン語で助けるを意味するマチュという言葉に着目し、プロテスタント教会活動と換金作物栽培の影響で変容するカレンの援助や互酬の概念と実践の変容について報告し、キリスト教の世俗的役割について考察した。また印刷中の論文では、イチゴ栽培という多大な初期投資・労働投資の下で変容するカレンの労働環境や新たな社会経済関係の形成について論じた(『東南アジア研究』に掲載)。夏期にはタイとミャンマーへ長期調査に出かけ、キリスト教の世俗的役割に関するフィールド調査を行ったほか、教会や神学校で聖書の翻訳や言葉遣いに関する資料を収集した。

成っている。

4年間の研究計画の初年度にあたる2016年度は、ピアサポータティブな更生プログラムあるいは更生保護プログラムを行っている国内外の施設を探索調査した。まず国内の矯正施設では、播磨社会復帰促進センターにおいて共同研究計画書の内容を確認して2017年度後半に実施するクラウニング講座での本調査の準備態勢を整えた。また矯正施設退所後の社会復帰支援関連施設の調査では、大阪市立阿武山学園における生活支援実態を調査した。

国外では、ノルウェー・オスロの更生保護団体NPOウェイバックを訪れ、国から資金援助を受けながらもピアサポータティブな社会復帰支援を行っていることを確認することができた。そこでスタッフの体制の聞き取りや少数ながら事例調査を行い、次年度調査への足掛かりとした。またフィンランド・ヘルシンキ刑務所において青少年対象の更生プログラムの紹介を受け、今後事例調査に入る態勢を整えた。さらにカナダ・BC州ヴィクトリアのハーフウェイ職員の来日に合わせて情報交換し、スタッフの体制や利用者の事例調査に入る準備を進めるなど、研究期間の2年目に入る土台を築くことができた。

加えて、国立重度知的障害者総合施設のぞみの園の研究検討委員として、矯正施設を退所した知的障害者等の特別調整対象者の住まいの変遷に関する調査研究に参画した。

個人研究

再犯リスクの低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価

研究代表者・教授 脇中 洋
(発達心理学・法心理学)

本研究(科研費助成事業基盤研究(C)課題番号16K03379)は、再犯リスクを抱えた受刑者/矯正施設退所者への更生を図る支援活動として、ピアサポータティブなプログラムを実践し、プログラム内容を練成しながらその評価を行うことを目的とし、矯正施設内でのクラウニング講座の効果検証、更生保護施設等におけるピアサポート活動の試行的実践とプログラムの練成、海外における更生保護事業との比較検討から

個人研究

『苔の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成

研究代表者・特別研究員 関本 真乃
(国文学)

本研究は、『苔の衣』諸伝本に関する書誌・本文調査を実施し、それぞれの本文を精密に比較検討することにより、諸本の関係性について従来の通説を見直し分類し、どのような書写・享受家庭を経て現存する『苔の衣』諸本の本文が形成されたのかを総合的に明らかにすることを目的とする。

本年度はまず、A前田家尊経閣本系統・B穂久邇文庫本系統、いずれの系統に属するのか明らかでない神宮文庫本について、国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによって翻字作業を行い、完了した。その結果、神宮文庫本がB系統に属することが明らかになっ

た。

そのほか、A系統と比較すると異同が激しいと言われるB系統諸本の調査を中心にすすめ、金沢大学本(4冊)・盛岡市中央公民館本(4冊)の書誌調査および写真撮影を行った。実践女子大学蔵の黒川四冊本については書誌調査を行い、複写を入手し、翻字作業を半分程度終えた。

また、東京大学文学部国文学研究室本(1冊零本)については、翻字作業を完了し、B系統諸本のうち、島原文庫本を祖とする可能性が高いことを分析した。

全巻の本文異同を取る作業は来年度の課題とするが、B系統諸本のうち、神宮文庫本と金沢大学本の本文は表記の面でも近似し、盛岡市中央公民館本の本文は、黒川四冊本及び穂久瀬文庫本と近似するようである。特に、黒川四冊本はほかの諸本とは表記の面でも異質であり、かつ登場人物の系譜について、本来そうであったらう正しい本文を有している。これが古態を残すからなのか、それとも書写者が正確な本文へと改変したからなのかについては、今後の課題としたい。

そのほか、実践女子大学蔵の黒川春村書入本の書誌調査を行い、複写を入手した。翻字作業を行い、黒川春村書入本がA系統に属することを分析した。

来年度は、引き続きB系統諸本の本文異同を分析し、並行してA系統諸本の調査、翻字作業を行う予定である。

個人研究

現存大蔵経諸本をもちいた 〈阿闍世王経〉漢訳諸本に 関する文献学的研究

研究代表者・任期制助教 宮崎 展昌
(仏教学)

本年度は〈阿闍世王経〉漢訳諸本に関する資料の収集を行いながら、それらの調査およびデータの入力、研究成果の発表を行なった。

(1) 資料の収集に関しては、京都・興聖寺蔵の写本一切経、名古屋・七寺蔵の写本一切経、大谷大学所蔵の高麗大蔵経再雕本(日本に現存する最古の高麗蔵再雕本と推定されるもの)、宋版(思溪蔵)、丹山順芸校訂の鉄眼版などについて閲覧・撮影あるいは複写資料を収集することができた。特に前二者は平安末期の古写一切経であり、貴重な資料である。

(2) 竺法護訳『普超三昧経』については、房山石経、

聖語蔵経巻と高麗蔵2種に加え、新たに、興聖寺、七寺の両一切経、磧砂蔵、宮内庁書陵部蔵の福州版を校合し、それらのデータの入力を完了した。支婁迦讖訳『阿闍世王経』については、高麗蔵再雕本、聖語蔵経巻、金蔵に加えて、新たに興聖寺および七寺一切経との校合を完了し、思溪蔵、磧砂蔵、宮内庁書陵部蔵の福州版との校合を現在行なっている。

(3) 竺法護訳『普超三昧経』の大蔵経諸本のうち、房山石経、聖語蔵経巻と高麗蔵2種の異読の共有関係に注目して、それらの相互関係に関する研究成果を公表した(『印度學佛教學研究』65巻1号)。本経に関しては巻中・下のみ限定されるかたちで、高麗蔵初雕本と聖語蔵経巻の間に顕著な近似性が確認され、その両者は系統関係上かなり近いと推定される。一方、高麗蔵再雕本は開宝蔵を底本とし、初雕本とは兄弟関係にあり、その制作にあたっては房山石経の底本とされる契丹蔵も参照にしたことが異読の共有関係の上からも確かめられた。

(4) 〈阿闍世王経〉の基礎研究の一環として、数年来取り組んでいるチベット語訳〈阿闍世王経〉全体の訳注研究の公表に先駆け、同経第II章の訳注研究を本研究所研究紀要34号に公表した。

個人研究

ジャイナ教の死生観に関する 基礎的研究 —断食死儀礼の規定を中心として

研究代表者・特別研究員 堀田 和義
(インド哲学(ジャイナ教)・死生学)

2016年度は、現在までに入手したシュラーヴァカ・アーチャーラ文献のシノプシス作成を中心とした作業を行った。この作業により、各文献における断食死儀礼の位置付けを明らかにし、シュラーヴァカ・アーチャーラ文献をいくつかのグループに分類することができた。

また、12種類のシュラーヴァカ・アーチャーラ文献の電子テキストを作成した。この電子テキストは検索可能なものであり、将来的にインターネット上での公開を予定している。

2017年2月にはインド・マハーラーシュトラ州ブネー市にあるバンドルカル東洋学研究所を訪れ、当研究所所蔵のシュラーヴァカ・アーチャーラ文献の写本、および刊本の調査を行った。当研究所からは所蔵写本

のリストが出版されているが、実際に研究所に赴いて調査したことにより、写本のリストから漏れているものも多くあることが判明した。今回の調査結果に基づいて、上記の写本に関するリストを作成し、将来的に公開する予定である。

2016年度の成果報告としては、9月4日に東京大学で行われた日本印度学仏教学会第67回学術大会において「在家信者の7つの悪徳」という題目で、ジャイナ教在家信者が避けるべき悪徳の概要とその起源について報告した。この発表内容は2016年12月発行の『印度学仏教学研究』第65巻第1号に論文として投稿した。

また、2017年3月17日には、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ研究学院で行われたワークショップ (the 19th Jaina Studies Workshop, Jainism and Buddhism) において “On Corresponding Sanskrit Words of Prakrit *posaha*: With Special Reference to Śrāvākācāra Texts and Buddhist Texts” と題する発表を行った。

個人研究

キンギョを用いた質感の進化的起源の検討

研究代表者・講師 高橋 真
(比較認知科学)

質感は視覚情報から触覚情報などが同時に生起することで生じる。こうした質感をもたらす知覚現象として共感覚が考えられる。共感覚は、ある刺激に対して通常感覚 (e.g. 視覚) だけでなく、別の感覚 (e.g. 聴覚) が生じる知覚現象である。特殊な知覚経験が共感覚症として知られているが、「ザラザラとした表面」というような一般的表現も、視覚情報が別の感覚様相である触覚や聴覚モダリティの情報が同時に処理されていることを示す。

先行研究では、ヒト・ネズミ目(ラット・ハムスター)・キンギョの比較実験により、視覚的なノイズと聴覚的なノイズの共通性をヒト以外の動物も認識している可能性が示唆されている (Takahashi, Taniuchi, Betsuyaku, Fujita, 2016)。その一方で、ヒトの場合、『明るい音』・『暗い音』といった触覚情報を直接的にもたらさない共感覚的知覚も成立する。このような組み合わせの共感覚的知覚を調べることは、質感が抽象化された情報 (刺激の強度) によって処理された現象かどうかを明らかにする。そこで、本研究ではヒト以

外の種であるキンギョが『明るい音』・『暗い音』共感覚的知覚を生じさせているかどうかを実験的に調べた。

本研究では、音の高さの変化 (高音と低音) と明るさ (黒と白) の変化が一致する刺激と一致しない刺激に対してキンギョが選好を示すかどうかを各刺激に対する滞在時間を測定することで検証した。4試行の実験を行った結果、第3試行においてのみ、一致刺激と一致しない刺激に対する滞在時間が異なった。このことは、頑健な結果ではないが、キンギョにおいてもヒトと同様の共感覚的知覚が成立している可能性を示す。すなわち、質感の基礎メカニズムが魚類の段階で成立した可能性を示唆する (Takahashi, 2016)。

引用文献

- Takahashi, M., Taniuchi, T., Betsuyaku, T., & Fujita, K. (2016) *The 31st International Congress of Psychology*. Pacifico Yokohama, Japan. July 27, 2016.
- Takahashi, M. (2016). Do goldfishes perceive congruency of bright and dark between color and pitch? 『日本動物心理学会第76回大会』. 2016年11月25日 北海道大学.

海外学会参加・研究調査報告

第18回国際仏教学会に参加して

国際仏教研究(英米班) 特別招聘者・講師 上野 牧生
デジタル・アーカイブ資料室 嘱託研究員 清水 洋平

2017年8月20日から25日まで、カナダのトロント大学にて国際仏教学会(International Association of Buddhist Studies, 以下 IABS)・第18回トロント大会(XVIIIth Congress Toronto)が開催された。IABSの大会は3年毎に開催され、前回のウィーン大会(2014年)に続き、今回は北米における仏教学の中心地であるトロント大学で開催された(次回は韓国のソウル大学にて2020年に開催予定)。また、IABSは仏教学分野における世界最大規模の学会として知られる。今大会も44のパネル、18のセクションが設けられ、26の国々、251の研究機関から集った447名の発表者により、416の研究発表が行われた。

この度、国際仏教研究班より派遣された上野と梶哲也(研究補助員・本学博士後期課程)は、それぞれのセクションにおいて研究発表を行うとともに、様々な研究発表を聴講する機会を得た。以下、我々が聴講したパネル・セクションの一部について概要を報告する。

1) ガンダーラ出土の初期仏教写本：新発見と新研究 (Early Buddhist Manuscripts from Gandhāra: New Discoveries and Research)

8月22日(9:00-12:30)

司 会：Stefan Baums, Ingo Strauch

パネリスト：Stefan Baums (Ludwig Maximilian University of Munich)

Ingo Strauch (University of Lausanne)

Joseph Marino (Cornell University)

Collet Cox (University of Washington)

Andrea Schlosser (Ludwig Maximilian University of Munich)

Ching Chao-jung (Ktoto University)

今大会において最も聴衆を集めたパネルのひとつは、ガンダーラ語の初期仏教写本に関するものである。まず、Convenerをも務めるバウムスにより研究の現況が紹介された。その発表では、広義でのガンダーラ語研究史が回顧され、現在はミュンヘン大学、ローザンヌ大学、イサカ・カレッジ、ワシントン大学にて

Bajaur Collection, Robert Senior Collection, The University Washington Scroll, Bamiyan Fragmentsの解読が進行中であること、それら76ほどの写本の内、既に19.5ほどは解読済みであることが示された。それらの成果は<https://gandhari.org> および <http://www.gandhara.indologie.uni-muenchen.de>のWerkstattにおいて研究利用に供されている。

続いてシュトラウフはBajaur Collection (BC)に含まれる*Prātimokṣasūtra* (cīvaravarga)の写本(BC13)を取り上げ、アトランタ大会(2008年)における自身の結論(BC13の所属部派に関して、rectoのGandhārī AはModified Original Sthaviravādinの所属、versoのGandhārī BはPre-Sarvāstivādinの所属)を覆し、BC13の所属部派は未確定であるとの見解を示した。

さらに、マリーノはRobert Senior Manuscript 20の内、大熱地獄を主題とする*Mahāparaṇhasūtra*を、コックスは注釈文献とも初期アピダルマ文献とも見なしているUW Scrollを、シュロッサーは大乗経典であるBC02をそれぞれ取り上げた。これら三者が取り上げたガンダーラ語写本は、現存する仏典に対応しない、未知の仏典である点で共通する。それはつまり、仏教学者がインド仏教史を再構成する際に依拠する仏典が、実は「インド仏教」というパズルを構成するピースの一部に過ぎず、既にそのピースの大部分が失われていることを意味する。そして、ガンダーラ語写本の研究は、そうした空白の一部を埋める可能性を秘めている。

2) 『長阿含』についての近年の研究(Recent Research on the Dīrghāgama)

8月22日(14:00-17:30)

説一切有部系の梵文『長阿含』ギルギット写本に関するパネルの内、特に関心が惹かれたのは『根本説一切有部律』(有部律)の研究で知られる八尾史(早稲田大学)の発表である(『マハーゴーヴィンダ経』とマハーゴーヴィンダの物語：『根本説一切有部律』の

バージョンに焦点を当てて)。有部律には多数の「経典」が含まれるが、律蔵と経蔵における「経典」の出入りは双方向的であり、各経典により事情は異なるという。そして「薬事」にある33の前世物語の最後部に位置するゴーヴィンダの物語（『長阿含』の *Mahāgovindasūtra* と平行、八尾『根本説一切有部律薬事』連合出版:2013, p.432f.を参照）を例として、「薬事」の複雑な成立事情が紐解かれた。具体的には、律文献の他のセクション（「律分別」など）・近年刊行された辛嶋静志によるトルクメニスタン・メルヴ出土のアヴァダーナ説話集成（そこには (*vistareṇa*) *yathā vinaye* という表現が4度出る）・経蔵などから、様々な経典や説話が「薬事」に取り入れられたと推測されること、また「薬事」の中から幾つかの説話が *Divyāvadāna* などのアヴァダーナ・アンソロジーへと抜き出されたことが論じられた。

3) 透明・半透明・不透明：インド仏教への窓口としてのインド語テキストの漢訳 (Transparent, Translucent, or Opaque: Chinese Translations of Indic Texts as Windows onto Indian Buddhism)
8月22日 (14:00-17:30)

このパネルの内、特に関心が惹かれたのはジョナサン・シルク (ライデン大学) による「チベット語における漢訳経典」(Chinese Sutras in Tibetan: Tapping the Guidance of Contemporary Readers of Buddhist Chinese) と題する研究発表である。チベットにおいて仏典翻訳事業が隆盛を誇った前伝期に、かつて本学教授・稲葉正就が取り上げた圓測『解深密経疏』などの中国撰述文献がチベット語に翻訳されたのみならず、幾つかの漢訳経典がチベット語に「重訳」された。そうした重訳チベット語文献は資料的価値が乏しいとして過小評価され、研究対象として注目を浴びることは少ない (例えば佐藤直実「大乘『大般涅槃経』重訳チベット語訳の有用性」『日本仏教学会年報』77, 2011を参照)。そうした中でシルクは、『無量寿如来会』(大正no.310 (5)) を取り上げ、この漢訳経典に確認される「乃至」の漢訳語が、その重訳チベット語資料 (敦煌写本) では *tha na* (少なくとも) と重訳されている例に着目する。そして、同経における「乃至十念」(*tha na rjes su dran ba rnam pa bcus, even ten moments*)、「乃至獲得一念浄心」(*tha na sems dang ba gcig tsam thob nas, obtaining even one pure thought*) などの訳例が『大無量寿経』(大正no.360) における「乃至十念」「乃至一念」に対するひとつの

解釈となり得る点を指摘し、重訳チベット語資料の有用性を喚起した。

これら以外にも数多くのすぐれた研究が発表されたが、紙数の都合上、割愛せざるを得ない。なお、上野は *Buddhist Hermeneutics, Scholasticism, and Commentarial Techniques* のセクションにて「Word by Word: 世親の『釈軌論』における注釈の技法」を発表し、梶は *Abhidharma Studies* のセクションにて「説一切有部における煩惱群について」を発表した。

次に、デジタル・アーカイブ資料室より派遣された清水が参加したパネルについて報告する。

パネル35: 南アジア・東南アジアにおけるパーリ語文献の写本伝統 (The Manuscript Tradition of the Pāli Text in South and Southeast Asia)

8月21日 (9:00-12:30)

司 会: Yamanaka, Yukio
(Dhammachai Tipitaka Project)

パネリスト: von Hinüber, Oskar
(University of Freiburg)
Shimizu, Yohei (Otani University)
Kodaññakitti, Venerable
(Dhammachai Tipitaka Project)
Kasamatsu, Sunao (Sendai National College of Technology)
Scott, Tony (University of Toronto)

パーリ語文献の写本伝統が古くから受け継がれているスリランカ・東南アジア地域では、三蔵とその註釈文献に代表される伝統的パーリ語文献に加え、長い歴史の中で数々の新たなパーリ語文献が作成されてきた。

この歴史を踏まえ、まず、Convenerの山中から、これらのパーリ語文献が現在に至るまでにどのように受け継がれ、どのような編集上の変遷があるのかという点を文献学的・言語学的視点から考察を深めることへの研究意義と、新たに作成されたパーリ語文献の豊富さへの理解を深めることの重要性について説明がなされた。

これを受けて最初に、著名な仏教学者でパーリ語写本研究の第一人者であるヒニューバーが、南アジア・東南アジアにおけるパーリ語写本研究の歴史とそこから浮かび上がる課題を総括しながら “The Wonderful World of Artificial Words in Pāli: An Editor’s Nightmare and a Linguist’s Delight” と題した研究

発表をおこなった。

次に、清水が“Report on the Pāli Manuscript Tradition and Transmission in Central Thailand”と題した研究発表をおこなった。タイ中部地域のパーリ語写本について、所蔵環境、所蔵状況（大谷大学が所蔵するパーリ語貝葉写本など海外所蔵写本を含む）、所蔵文献の全体像の特徴についての報告と、タイ中部地域のパーリ語写本の読解研究を進めていく上での留意点について具体例を示しながら報告した。続いて、コンダンニャキッティ学僧は“Selection of Burmese Pāli at the Dhammakaya Tipiṭaka Project”（発表者の都合により不参加の為、同学僧と所属機関が同じである司会者：山中が発表原稿を代読）と題した研究発表をおこない、Dhammakaya Tipiṭaka Projectが実施しているミャンマーにおけるパーリ語文献調査から見てきた同地域のパーリ語写本の文献の特徴が報告された。

次に笠松が、“On the *Jinalankāra* and Its *tikā*”と題する研究発表をおこない、スリランカで12世紀に作

成され、技巧的な278の偈文からなるパーリ語文献 *Jinalankāra* とその註釈文献を取り上げ、その中で使用されている複数の単語の用法を例示し、伝統的パーリ語文献の用法との比較研究の報告がなされた。続いてスコットは“Buddhist Commentary, Discourses of Modernity, and the Political in Post/Colonial Burma: The *Milindapañha-aṭṭhakathā* of Mingun Zetawun Sayadaw”と題する研究発表をおこない、ミャンマーで作成された *Milindapañha* の註釈文献を取り上げ、伝統的パーリ語文献の文法的用法との比較研究の報告がなされた。その後、同パネル全体のディスカッションがおこなわれた。

ディスカッションでは、多くの聴衆を交えて活発な質疑応答がおこなわれたと共に、ミャンマーやタイに所蔵されている手付かずの仏典写本の研究の重要性も再確認された。また、日本に所蔵されているタイの仏典写本研究についての情報整理の進展が望まれることや、大谷大学所蔵のパーリ語貝葉写本についての情報提供の依頼なども複数受けるなどした。

今回の学会に参加し、世界の仏教研究の動向を把握できたことや、海外で活躍している多くの仏教研究者と意見交換がおこなえたことは有意義であった。また、同パネルの参加者と大谷大学所蔵貝葉写本についての今後の研究進展についての議論ができたことも有益であった。

尚、今大会のプログラムと発表要旨は

<http://iabsinfo.net/conferences/past-conferences/>にて公開されている。



発表する上野牧生特別招聘者



発表する梶哲也研究補助員



総会会場である Convocation Hall 前での
清水洋平嘱託研究員

ヨーロッパ日本研究協会第15回国際大会参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師 Michael J. Conway

2017年8月30日から9月2日にかけて、ノーヴァ・デ・リスボン大学人文社会科学部を会場に、ヨーロッパ日本研究協会の第15回国際大会が開催され、ヨーロッパのみならず世界各地で日本研究および日本語教育研究に携わっている研究者約900名が集い、研究交流をした。筆者は大会に参加し、9月1日の夕方に研究発表を行った。

ヨーロッパ日本研究協会は、日本研究に関わる幅広い分野の成果を共有し、学者の交流を支援する組織として41年前に設立された。今回の大会には計14部会が設けられ、主要な部会名をいくつか挙げると、近代文学、前近代文学、人類学・社会学、メディア学、政治経済学、歴史学、宗教学・宗教思想、思想史などがあつた。部会によって日程を通して14回から20回のセッションが開催され、各セッションには3名の発表が行われたので、全日程を通じて700名以上の発表があつた。

筆者は宗教学・宗教思想および思想史の部会を中心に聴講した。人類学的手法を取り入れた現代の日本の宗教に関する発表や近代仏教に関する発表、近年の西洋の学界の関心を如実に映しているものも多くあつたが、一方、近世に関する研究も今までに見られないほど多く、近年の近代仏教ブームのルーツを更に遡ろうとする動きも見られ始めている。

その傾向を物語るものとして、宗教学・宗教思想部会では、「護法思想」に注目して幕末期と明治期の護法論の共通性を指摘するパネルも催された。また、同じ部会で、江戸後期に起こった京阪切支丹事件の取締についてのパネル発表も行われた。更に思想史の部会では、室町後期、江戸初期に作られた世界地図が描かれた屏風の内容および意義とその知の流布の仕方を考察するパネルもあつた。

筆者は、オハイオ州立大学助教授のMelissa Anne-Marie Curley氏と現地地で合流し、思想史部会で、近代の真宗思想における時間論について発表した。「時間」という部会の全体テーマに応じて、私は曾我量深の時間論について紹介し、カーリー先生は田辺元の時間論とそこに見受けられる曾我の影響について発表した。

私たちのセッションと同時に、宗教学・宗教思想部会では、現代の仏教教団が高齢化、過疎化に伴う檀家数の減少に如何に対応しているかということを紹介するパネルが行われ、そちらの方に関心が集まったよう

で、私たちのパネルの聴講者は少なかった。西洋の学界における真宗の不人気、または思想に対する関心の薄さということを感じさせられた。思想史部会の参加人数は、日程を通して宗教学・宗教思想部会と比べて少なく、宗教思想の内容より、宗教現象に重きを置く傾向が見られる。しかし真宗の場合、海外の日本研究者の無関心がより一層深刻のように思う。

本学の真宗研究は丁寧な聖教読解に基づく思想究明を軸としているため、今後、その成果を国際的に発信していくのに、種々の工夫が必要となると考えられる。国際仏教研究班の研究員をはじめ、その課題を共有し、適切な発信法を模索していきたい。



コンウェイ研究員の発表の様子



カーリー准教授の質疑応答の様子

マギル大学の「南都浄土教」ワークショップに参加して

国際仏教研究（英米班） 研究員・教授 Robert F. Rhodes

2017年9月29日にモントリアル（カナダ）のマギル大学で開催された「南都浄土教」をテーマとするワークショップに参加する機会を得た。マギル大学は三万八千人近くの学生数を誇るカナダ有数の大学であるが、仏教研究の長い伝統も持ち、仏教伝道協会の寄付講座である沼田チェア（Numata Chair）も宗教学科に開設されている。現在マギル大学宗教学科で日本仏教を担当しているのは、興福寺の歴史と日本の法相教学を研究対象としているミカエル・パウアー（Mikael Bauer）教授であるが、今回パウアー教授は中世奈良の浄土教についてのワークショップを開催することになり、私に参加を要請したので、カナダに出張することになった。ちなみに、パウアー教授は十五年ほど前に本学の修士課程国際文化専攻に在籍していたこともあり、そのようなご縁もあって、私がワークショップに招かれたのであった。

今回のワークショップは主催者によって招待された南都浄土教の専門家6名と応答者（respondent）3名、そして若干の大学院生という、限られた人数を中心に行われた。各発表者はそれぞれのテーマについて二〇分の発表を行い、その後に三〇分ほどをかけて発表に対して突っ込んだ質疑や意見交換が行われた。このようなワークショップ形式のおかげで通常の学会とは違い、活発で徹底した議論を行うことができ、とても有意義であった。

このワークショップは9月29日の午前9時から午後5時まで、マギル大学宗教学科のあるパークス・ホールで行われた。最初に私が今年6月に出版した *Genshin's Ōjōyōshū and the Construction of Pure Land*



学会発表する筆者

*Discourse in Heian Japan*について、二名の参加者（クリス・キャラハン教授とアロン・プロフィット教授）がコメントをして、それを受けて私が本の内容を簡単に紹介し、コメントに答える Book Presentation が行われた。その後、六名による研究発表が続いたが、その内容は次の通りであった。

1. *Yōkan's Interpretation of the Nenbutsu in the Ōjō jūin* (『往生拾因』に見られる永観の念仏観)
Robert F. Rhodes, Otani University (ロバート F. ローズ、大谷大学)
2. *Grounding Heavens: Pure Land Thought and Cosmology in Liturgical Texts from Ancient Japan* (天界を地上に根差す—古代日本の礼拝文献における浄土教思想と宇宙観)
Bryan Lowe, Vanderbilt University (ブライアン・ロー、ヴァンダービルト大学)
3. *Dharani, Spells, the Power of Speech and Ko-mitsu Approaches to Pure Land Rebirth in the Nara Period* (陀羅尼、真言、言葉の力と古密の浄土往生観)
Aaron Proffitt, State University of New York, Albany (アロン・プロフィット、ニューヨーク州立大学アルバニー校)
4. *Yōkan and the Ōjōkōshiki* (永観と『往生講式』)



マギル大学パークス・ホールのチャペルでの筆者

Christopher Callahan, University of Illinois Urbana-Champaign (クリストファー・キャラハン、イリノイ大学アーバンナ・シャンブレイン校)

5. Manjusri, *Hinin* and Mount Wutai: Kasuga's Pure Land and the Development of Funerals in Medieval Japan (文殊菩薩、非人と五台山—中世日本における春日浄土と葬儀の展開)

Jesse Lefebvre, Harvard University graduate student (ジェシー・ルフェーブ、ハーバード大学大学院)

6. Dedicating the Pure Land to the Fujiwara Patriarch: Traces of the Pure Land at Kōfukuji and the Hossō School (藤原氏の開祖に浄土を捧げる—興福寺と法相宗に見られる浄土の痕跡)

Mikael Bauer, McGill University (ミカエル・バウアー、マギル大学)

またマギル大学で中世文学を専門とするトーマス・ラマール (Thomas Lamarre) 教授、マギル大学大学院生のジンジン・リ (Jingjing Li) 氏とハーバード大学大学院生のエリック・スワンソン (Eric Swanson) 氏も応答者として学会に参加した (ちなみに、ロー教授とプロフィット教授は真宗総合研究所の研究員として、バウアー教授は先にも述べたように修士課程の大学院生として、大谷大学で研究を行った経験があることを付け加えておく)。またワークショップの成果は、今後近いあいだに、一冊の論文集として出版する予定である。

モンゴル国立大学との共同調査報告

西藏文献研究 研究員・教授 松川 節

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13～17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」の一環として、2017年度モンゴル国現地調査「ゴビアルタイ県に建立された黄教伝播初期の寺院・考古遺物に関する野外調査」を2017年8月19日～8月30日に行った。参加者は日本側が松川1名、モンゴル側がM. ガントヤー(哲学宗教学科教授)、S. デムベレル(同学科講師)、Lh. テルビシ(モンゴル国立大学名誉教授; 専門は暦算学)の3名であった。

8月21日(月): 09:00ジープ2台に分乗してウランバートル市を出発し、オボルハンガイ県中心地(アルワイヘル市)を経由し終日走行、21:00、656キロ走行してバヤンホンゴル県バヤンホンゴル市まで移動した。(バヤンホンゴル市泊)

8月22日(火): 08:25バヤンホンゴル市を出発し本日も終日走行、18:05ゴビアルタイ県アルタイ市に到着、エントゥムホテルに投宿した。移動距離は400キロ、ウランバートルから1,056キロ。地元の有力者、ゴビアルタイ県音楽団団長のエンフバト氏の接待で夕食。ゴビアルタイ県立博物館の学芸員ネルグイ氏が合流し、明日以降の調査スケジュールについて意見を交換した。(アルタイ市泊)

8月23日(水): 09:00ホテルを出発。ネルグイ氏の案内で、市の南郊にあるハントイシル山中の2つの寺

院址(ザサグトハン寺院とその別院)を調査した。19:30アルタイ市を通過、そのまま北上し、20:30タイシル郡着、郡文化センターに宿泊した。(タイシル郡泊)

8月24日(木): 07:20宿舎を出発。郡博物館の学芸員バヤンムンフ氏の案内で、郡中心から東に20キロ離れたところに位置するナロワンチン寺院址を調査。10:30ザブハン河水力発電所を見学。13:45ジャルガン郡中心地着。郡知事、郡博物館学芸員ネルグイ女史と意見交換。15:00郡南郊の岩山にてモンゴル文字銘文を調査。16:30アリイン・フレー寺院址調査。19:00バヤンオール郡中心地にて寺院調査と車両修理。20:30出発、ダルビ山地とトンヒル山地を越え、24:18トンヒル郡着。郡保健センターに投宿。(トンヒル郡泊)

8月25日(金) 08:00トンヒル郡中心地のオサン・ズイル寺院を調査。09:20トンヒル郡発、トンヒル山地を北上し、ソタイ山を祭祀する大オボーに11:00着。標高3,274メートル。再びトンヒル郡中心地を経由して南行し、14:20アツティン・アム着。ここは17世紀末に西モンゴルのガルダン・ハンが清朝康熙帝との戦いに敗れて敗走し、最期を迎えたとされる地である。ダルビ郡に移動し、19:30ダルビ郡中心地着。郡知事のガンバートル氏、郡議会議長のバヤンモンフ氏の接待。郡一般教育学校寮に投宿。(ダルビ郡泊)

8月26日(土) 08:00ダルビ郡中心地発。ダルビ山中にある2カ所の寺院址を調査。18:00ダルビ山中に郡知

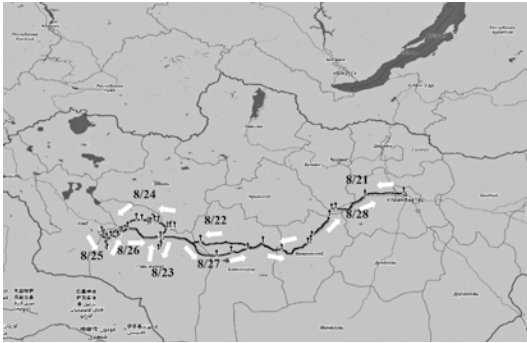
事が用意してくれた天幕住居にて野営した。(ダルビ郡泊)

8月27日(日) 08:00ダルビ山中発。12:00アルタイ市通過。20:30バヤンホンゴル県バヤンホンゴル市に到着した。(バヤンホンゴル市泊)

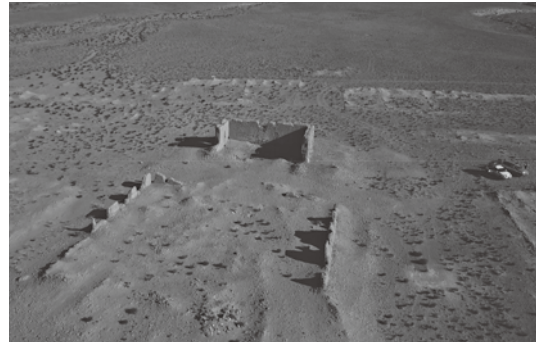
8月28日(月) 08:00ホテル発。11:30オボルハンガイ県中心地(アルワイハール市)を通過、20:00ウランバートル市に帰還した。全走行距離は3,000キロに達した。

一般の調査においては、モンゴル国立大学側参加者

のテルビシ名誉教授とガントヤール教授がともにゴビアルタイ県出身であることから、現地調査において地元関係者・関係機関から数々の便宜をはかっていただいた。特に8月26日に調査したダルビ山中の2カ所の寺院址などは、地元機関の協力が無ければ決して調査できない急峻な山中にあった。これらの寺院が、果たして黄教伝播初期のものであるかどうかを確定するには、さらにチベット語・モンゴル語の文献資料を博捜する必要があるだろう。



現地調査行程図



ナロワンチン寺院址

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院訪問と ハノイ近郊ベトナム仏教寺院調査に関する報告

ベトナム仏教研究 研究代表者・教授 織田 顕祐

2017年6月17日(土)から21日(水)の日程で、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院訪問とハノイ近郊ベトナム仏教寺院の調査を実施した。以下にその内容を報告する。報告は、日程順ではなく重要な項目順とする。

○宗教研究院訪問

今回の宗教研究院訪問の目的は、ゲン・クオック・トゥアン院長の定年退職と、チュウ・ヴァン・トゥアン新院長の就任を表敬することであった。本学も加藤丈雄研究所長が新任されたので、今後の共同研究の諸課題について改めて現状を確認し、意思を共有するための訪問である。そのため、研究代表者・織田と加藤所長の二名が訪問した。宗教研究院には6月19日の午前中に訪問した。

一通りの挨拶の後、本学と宗教研究院の交流、共同研究の現状とこれらに向けての具体的な確認を行った。話題は順を追って多岐にわたったので重要な確認事項のみを以下に記す。

「日越仏教辞典・概説」その他の課題については協定書に基づき、前任者を引き継ぎこれからも変わりなくやっていく。これまでの個人(旧院長の個人的な考え方のことを指すと思われる)・ならびに組織全体で確認したことは、そのままこれからの宗教研究院の意向である。「ベトナム概説」執筆の遅れは、トゥアン旧院長が引き続き担当するが、自分(ヴァン・トゥアン新院長)に責任がある。この点はトゥアン旧院長と相談しながら進めていく。その「ベトナム仏教概説」の原稿は年内に完成させる。その上で細部の調整・検討を加えた上で、大西囑託研究員に翻訳をお願いしたい(新院長の意向)。

「日本仏教概説」は、少しずつ翻訳・発表していくのではなく、単行本として出版した方がよいと考える。ベトナム語翻訳については宗教研究院側が責任を持って担当するが翻訳に必要な経費は別途相談したいとのこと。色々課題は多いが、今当面していることを確

実にやっていきたいというのが新所長の意向である。院長が交替しても基本的な方針は従来通りであることを確認した。

この日の深夜（厳密には20日の早朝）加藤所長は都合により単身帰国された。

○ベトナム仏教寺院調査

6月18日（宗教研究院訪問の前日）の午後、バクニン省トアン・タイン地区にある法雲寺（通称、桑寺）を訪問・調査した。法雲寺（チュア ファップ ヴァン）はベトナムに初めて仏教が伝えられたとの伝説を持つ寺（いわゆるキューダラー伝説）で、さらに同寺周辺は後漢末の交趾太守が都と定めた場所である「羸楼（ルイロウ）」に比定されている。近年、ここから隋文帝の建立による舍利塔の銘を刻んだ石板が発掘され、同地がルイロウであることが確認された。これは考古学的にも非常に重要な発見であったとされる。同寺は、ベトナムにおける仏教伝来にまつわる寺としてよく知られている。法雲寺は一般のベトナム寺院が最も奥に三尊仏を配置する複雑な形式を持つのに比して、女性とみられる立派な法雲仏を本尊とすることに特徴がある。その後、「ルイロウ古城跡」を見学し、士燮（ししょう）廟（中国漢代の交趾太守でベトナムに初めて儒教などの中国文化を伝えたとされる人物の廟）を探し、土地の古老の話聞くことができた。

6月20日（火）午前中に、ハノイ北西部のタム・ダオにおいて、織田、大西、グエン・ヒュー・スー宗教研究院所員の三名で、今後の研究交流について意見交換した。その後近郊の西天寺（チュア タイ ティエン）を拝観した。本来の北部の仏教にチベット密教が重なったベトナムでも珍しい寺院である。広大な山域を有し、電気自動車・ゴンドラ等が整備された巨大寺院である。山内の一堂で、一人の比丘尼が巫女舞のような儀式を

行っており、女性信者が紙幣をまき散らしながら熱心にお参りしていた。仏教・密教と道教が習合した儀式のようである。大西氏が初めて見たようで、「とても珍しいものを拝見した」と感心していた。夕方ハノイに戻り、深夜VN330便にて帰国した。



法雲寺の法雲仏



加藤真総研所長とトゥアン新宗教研究院長

タイ渡航調査報告

東京分室 PD研究員 田崎 郁子

2017年7月から8月にかけて、タイ国へ渡航し、タイのカレン社会におけるキリスト教への改宗や聖書の翻訳がもたらす日常生活への影響について調査した。今回はカレンと呼ばれる少数民族の村落でのフィールドワークを行い、カレンの人々の死生観、疾病、夢など、改宗以前は精霊信仰、祖霊祭祀と関連の深かった部分が、キリスト教への改宗以後はどのような新たな

言葉で捉えられ、それと共に人々の認識が変容したかについて、調査を行った。

主にバプテストからなるメーヤングハー村では、改宗後2-3世代が経過しており、人々は既に精霊や靈魂との関連で死や病を捉えることを行わない。そこでは、前回の調査報告で書いたように『ノベのライフ・ヒストリーにみるキリスト教会と生活の関連』大谷大

学真宗総合研究所報、No.70)、人々は自らの人生を、その主な場面において常にキリスト教との関係の中で選択の方向付けをしてきたものとして位置づけて語る。信徒にとってはキリスト教は、社会関係や経済など他の領域とも相互作用の中にあり、生活そのものとなっていた。

一方で、今回聞き取りを行ったデーノン村やパグリア村、メーランカム村では、キリスト教徒もいるものの精霊信仰や仏教徒、カトリック信徒のカレンも混在している。そこではメーヤングハー村で見られたように、宗教との関連で人生の選択を語るというよりは、病や死など人生の避けられない困難と信仰がセットになって語られることが多い。例えば、カレンの間には現地語で「グラ」と呼ばれる魂の概念があり、人間観の基礎をなしている。グラは精霊に呼ばれたり夢を見ることで容易に人間の体から離れ、また彼岸と此岸を行来する。グラが長期間人間の体から離れると人間に病や死をもたらすため、カレンの儀礼や治療の主な関心はグラを人間の体に呼び戻すことに向けられる。そして、精霊信仰や仏教徒のカレンは、このグラを呼び戻すための儀礼を熱心に行い、またまさにこのために改宗の選択をするのである。

例えば、デーノン村の60代の男性は、自らのカトリックへの改宗とグラを結びつけながら以下のように語った。

「祖霊祭祀は精霊を沢山供犠しなければならず、やっていけないんだよ。儀礼の決まりごとが多く、この場合はグラを呼ぶ、この場合は何儀礼をする…動物の処理の方法、場所、切り方、調理の仕方…とにかく決まりごとが多いんだ。それに、間違えると再び災厄を招くことになるし、だからといって儀礼を行わないことも許されない。でも、カトリックには禁止事項が1つしかないのさ。日曜に教会へ行くこと、それだけで、とても簡単なんだよ。だけど、たまに頭のところに精霊が来て、教会礼拝に行かなくてもいいんじゃないかとそそのかすんだ。いつだって精霊はすぐ近くにいるよ。でも、だからと言って再び精霊を供犠することはないさ。一度決めたら一つの道を進むべきだし、2本の道を進むことは出来ないからね。」

このような精霊信仰とは全く異なるキリスト教の語り口を、現地の視点から理解することが最近の課題である。



メーヤングハー村の教会礼拝の様子、子どもによる賛美歌隊



他村へ宣教に歩くプロテスタント派の宣教師夫婦（左）と
もてなす村人（右）

4年ぶりのパリ訪問 ——フランス国立図書館での文献調査

一般研究（藤田班） 研究代表者・准教授 藤田 義孝

一般研究（予備研究）「『世界文学研究』の方法論構築—サン＝テグジュペリ『星の王子さま』研究を通じて」の調査研究のため、2017年8月7日(月)から22日(火)の旅程で渡仏した。目的は、『星の王子さま』（1943）

の受容と流通の広がりを明らかにするため、パリのフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France, 略称 BnF）で1940年代から80年代にかけてのフランス語や英語の書評や論考などを調査することで

あった。

フランス分野の教員・研究者でありながら渡仏は実に4年ぶり、2013年のフランス文化研修の引率以来である。その間、2015年1月にシャルリ・エブド襲撃事件、11月にはパリと近郊での同時多発テロ、2016年7月にもニースでテロが起こり、フランスはテロの標的國家というイメージが定着した感がある。2017年7月にはフランス国内の非常事態宣言がさらに4か月延長されることが決定され、そのような「厳戒態勢」にあるパリを訪れることとなった。

今回のパリ滞在の宿は、なるべくBnFに近く、かつ治安の問題がなさそうな場所としてプラス・ディタリー（13区）を選んだ。パリの中環街への入り口にあたり、交通も買い物にも便利な立地である。さらに、キリスト教とイスラム教という宗教的・文化的対立軸のいずれにも与しないアジア文化圏の影響が強い界限なので、テロの危険性が低いかもしれないという見込みもあった。

その考えが正しかったかどうかは不明だが、二週間ほど滞在した限りでは、パリでの生活は平穩そのものであった。観光客も多く、エッフェル塔やノートルダムなど人気の観光名所では長い行列が見られた。ただし、行列が長くなるのは、厳重になったセキュリティチェックのためでもある。かつてエッフェル塔の真下は自由に歩き回れたが、今では柵で囲われチェックを

済ませないと入れず、武装した警官（憲兵）が常駐している。だが、恐らくはそのおかげで、4年前には少なからず見られた怪しげな物売りなどはすっかり姿を消していた。観光名所や美術館だけでなく、ショッピングモールの利用やBnF入館の際にも毎回セキュリティチェックが必要だったが、パリではこうした「警戒態勢」も既に日常の一部になっているようだった。

1996年にリシュリユーからトルビアックに移転したBnFには、セヌ河岸の広々としたテラスの中央から階段を下って入るのだが、本来複数ある入り口は一つを除いて封鎖され、入館者はすべからくセキュリティチェックを受けていた。BnF内部は、一般向け閲覧室やギャラリー、売店、カフェなどを備えた上部階層Haut-de-jardinと、研究者向け閲覧室のある下部階層Rez-de-jardinに分かれており、1年有効の利用パスは上部階層が15ユーロ、下部階層は50ユーロだった。研究用の文献・資料を閲覧するには、資料と座席を前もってオンラインで予約しておき、予約した時刻に下部階層の該当閲覧室のカウンターで資料を受け取る仕組みである。パリ滞在中は、下部階層閲覧室でひたすら資料に目を通し、ノートを取り、タブレットで資料を撮影する日々であった。予定していた資料はおおむね集めることができたが、一部の英語資料などは見当たらず、今後の調査課題として残されることとなった。



トルビアックのフランス国立図書館（BnF）は、中庭が林のような庭園で、内部は二階層になっている。



一般閲覧者は立ち入れない研究者向けの下部階層廊下

国内研究調査・学会参加報告

「新しい時代における寺院のあり方」に関する調査報告

新しい時代における寺院のあり方研究 研究員・准教授 徳田 剛

本研究の初年度においては、少子高齢化や人口減少に瀕している過疎地域に立地する寺院の現状と今後の課題について、理論研究と実証研究の両面から考察することを目指している。前者においては、メディアによる報道、研究者による先行業績や仏教各派による教勢(宗勢)調査の結果及び分析内容など、「過疎と寺院」に関してどこまで明らかにされているかについて資料収集と分析を行い、本研究の分析視角の彫琢と現地調査の準備に主眼を置きつつ研究を遂行した。現地調査に関しては、2017年度上半期では調査対象地の選択や調査内容・質問項目などの検討を進めるため、2度の予備調査を実施した。

【岐阜県揖斐川町における予備調査】

《実施日：2017年6月30日 参加者：東館紹見教授・徳田剛准教授》

本研究では、1) 人口減少の傾向が見られる地域であること、2) 浄土真宗の信仰が篤い地域であること、3) 調査協力者との信頼関係を構築しやすいこと、の3条件を念頭に置きながら、寺院および地域調査を実施する対象地域の検討を行った。その結果、大谷大学真宗総合研究所の指定研究「教如上人関係史料調査」(2014～2016年度)の調査地である岐阜県揖斐川町において予備調査を実施することとなった。2017年6月

30日に研究員の東館・徳田の両名が同町を訪問し、真宗大谷派大垣教区第8組・発心寺にて4人の住職より聞き取り調査を行った。主な調査項目は、1) 寺院の歴史・運営状況、2) 門徒数と年中行事の概要、3) 寺院が立地する地域の状況、4) 在地門徒の他出子や離郷門徒との関係、5) 今後の寺院運営および地域の見通しについてである。これらを事前に調査協力者へ通知し、当日は各住職より質問内容への応答をしていただき、追加で質疑を行った。

調査結果の概要は以下のとおりである。まずは、かつては林業や炭焼きなどで栄えたこの地域も高度成長期のエネルギー革命や木材価格の低迷でかつての収入が得られなくなり、若年層を中心に他出する者が相次いでいる。谷間に沿って点在する集落のそれぞれに1つもしくは複数の寺院が立地していることから現状の人口数に比して寺院の数が多く、多くの寺院は門信徒の減少に悩まされている。この地域特有の「春日五日講」や報恩講を初めとする年中行事は今も受け継がれて実施されているが、長期的に見てどこまで継続可能かは分からない。また、当地から大垣市や岐阜市などの都市部へは自家用車を使えばそれほど遠距離というわけではなく、郷里と行き来したり関係を維持したりすることが可能な距離帯にあることがわかった。以上のことから、同地を本研究の現地調査を実施する際の有力な候補地として、引き続き調査実施に向けた検討を進めることとなった。

【石川県七尾市における共同調査への参加】

《実施日 2017年8月25日～28日 参加者：徳田剛准教授、磯部美紀(研究補助者・大学院修士課程)》

能登地方で実施された共同調査は、超宗派で構成される「過疎問題連絡懇談会」(事務局：真宗大谷派企画調整局)の主催によるものである。本研究班の研究會に講師として招聘した大江則成氏(真宗大谷派企画調整局次長)より同會の存在をご教示いただき、他宗派との問題意識や調査研究の成果・ノウハウの共有をはかるべく、徳田研究員による同會への参加と能登地方での寺院・地域調査への同行に至った次第である。



岐阜県揖斐川町での聞き取り調査のようす(2017年6月)



石川県七尾市での聞き取り調査のようす（2017年8月）

今回の能登調査では、次の2つのアプローチが取られた。1つは、対象地域内の寺院を4つの調査班が訪問し、住職等に寺院の概要や運営状況、門信徒の数や行事の実施状況、離郷門徒の分布やつながり、今後の寺院および地域の見通しなどについて聞き取りをする「寺院調査」である。もう1つは、同市内の特定の集落において、各戸の居住状況や他出子の所在やつながりなどを地域住民に確認をしながら図示していく「T型集落点検」によるワークショップの実施と、同集落の個別訪問による聞き取り調査（地域の状況や寺院との関係など）を行う「集落調査」である。これらの方式は本願寺派総合研究所によってすでに別地域で実施されたものであるが、今回の調査では複数の宗派の寺院を対象として実施された。「集落調査」は龍谷大学社会学部の猪瀬ゼミの教員・学生が主に担当した。寺院調査グループの全体では、七尾市内の20カ寺の寺院（真宗大谷派8カ寺、本願寺派6カ寺、曹洞宗4カ寺、日蓮宗1カ寺、真言宗1カ寺）に対して調査を行った。徳田・磯部の両名は寺院調査班の1つに同行し、真宗大谷派寺院2カ寺、本願寺派寺院1カ寺、曹洞宗寺院1カ寺を訪問し、徳田はサポート要員として集落住民の訪問調査にも一部参加した。

当地の真宗大谷派寺院の件数は多く、歴史的にも浄土真宗の信仰の篤い地域ゆえに寺院や門信徒の活動も依然として活発であり、他地域ではもう行われなくなったような仏事や講が今も受け継がれているところが見られた。しかしながら、寺院あたりの門徒数が少ないところが多く、門徒の高齢化と減少の影響を少なからず受けている印象を受けた。地域概況としては、調査地域内の主要な産業は農業や漁業、観光業などで、いずれも雇用吸収力の大きな産業とはいえ、若い世代の多くは七尾市の中心部や金沢都市圏などへ他出で、就労・定住をしているようであった。離郷・他出

した門信徒やその子孫に対しては、約50km離れた金沢市あるいは石川県内の在住であれば、郷里の寺院からお知らせや教化資料を送付したり法事のお参りに行ったりするケースもあるが、それ以遠の場合では実際の関係継続は難しいようであった。

なお、この能登地域に特有の風習として、他家に嫁いだ門徒子弟がお盆などに郷里に戻って寺院にお参りをする「コンゴまいり」（漢字表記については「金剛」や「魂迎」など諸説がある）があり、地域を離れた門徒とのつながりを維持する仕組みが存在する。しかしながら、他の習慣や仕組みと同様に、このような伝統的な地域や寺院の運営の仕方や信仰形態を「当たり前」のように継承してきた世代と、それらになじみのない若い世代とでは意識が大きく異なってきており、現時点で当地の地域社会や寺院の支えとなっているものがどこまで維持可能であるのかについては予断を許さない状況と言えそうである。



調査を行った石川県七尾市・覚永寺（2017年8月）

本研究班では、以上のような予備調査によって得られた知見やノウハウを踏まえながら、2017年度の下半期では本調査に向けた準備（調査方法や質問項目の検討、調査実施のための環境整備など）を進めていく。本調査の対象地域としては、すでに予備調査を行っている岐阜県揖斐川町を念頭に置いており、当地の調査協力者（寺院関係者や行政職員など）に接触し、地域概況や調査実施に向けて必要となる情報の収集と分析を行っていく予定である。

全国大学史資料協議会 2017年度総会ならびに全国研究会に参加して

大谷大学史資料室 嘱託研究員 松岡 智美

大谷大学史資料室は、毎年、全国大学史資料協議会西日本部会に参加している。2017年度は、筆者と老泉量氏(研究補助員)が第1・2回研究会と全国研究会に参加する機会を得たので、本報告で全国研究会について書いていきたい。

全国研究会は10月11日(水)～13日(金)の3日間にわたって、愛知大学を中心に開かれた。初日11日は、総会に続いて平松礼二氏の講演、大学記念館等の見学が行われ、最終日13日には、羽田八幡宮蔵(旧羽田八幡宮文庫)等を見学した。2日目は、全国研究会・見学会が下記のプログラムで行われた。

1. テーマ発題・基調報告 豊田雅幸氏(立教学院展示館)
2. 堀田慎一郎氏(名古屋大学大学文書資料室)
「名古屋帝国大学から新制名古屋大学へ—歴史とアーカイブズ—」
3. 松岡智美(大谷大学 大谷大学史資料室)
「旧制大学から新制大学へ—大谷大学の事例より—」
4. 阿部裕樹氏(明治大学史資料センター)
「短期大学の発足と明治大学短期大学」
5. 上野平真希氏(熊本大学文書館)
「地方国立大学の設立と地域社会—熊本総合大学期成会資料を中心に—」
6. 愛知大学豊橋キャンパス見学・愛知大学公館見学
7. 齊藤研也氏(神奈川大学大学資料編纂室)
「横浜専門学校の昇格過程—神奈川大学の誕生—」
8. 田辺勝巳氏(愛知大学東亜同文書院大学記念センター)
「旧制大学として創立した愛知大学の創成期—新制大学への移行期も顧みて—」
9. 総括討論

今回の全国研究会は「新制大学発足をめぐる各大学の動向—その資料と活用—」をテーマに、国立大学と私立大学のように立場の異なる7大学の事例が報告された。

今回、筆者は、『大谷大学百年史』を基に、当資料室の所蔵する資料を提示しながら、1949年を中心に、大谷大学の旧制大学への移行過程について、制度と施設の2方面から報告した。まず、制度面では、大学機構の改革が行われた。1945年11月13日に、本学はいち早く戦後の新しい状況に応じた機構改革を行うために学

制審議会を設立し、分科会ごとに具体的な検討に入った。約2年半の検討を経て、『大学基準およびその解説』が設定した基準を踏まえて、『大谷大学設置認可申請書』を文部大臣宛に提出するに至る。申請書では、建学の精神に則り、仏教精神による人格の陶冶を第一義として仏教・人文を学び、それを世界に解放しようとするを目的および使命としたことを示した。次に、施設面では、『大学基準』において校舎や諸設備の設置と改良が定められていたことから、キャンパス建造物を改増築した。これは、校舎の多くが大正初年頃の木造建築であったために老朽化が進んでいたことや、講義の増加による教室不足の解消、戦後第一次ベビーブーム世代が1966年から大学進学年齢となることによる学生急増に対処するために行われたことを指摘した。

新制設立後の1949年と50年の2年間は、旧制中学の生徒は新制大学に入学できない等の入学資格による問題や、旧制で学ぶことを望む者への配慮により、旧制の学生募集が並行して行われていた。多くの大学は、新制移行を機に旧制の募集を停止しており、これは稀な事例といえる。また、他の報告や年史等から、本学や多くの私立大学が、1949年に新制大学へ移行・昇格する際に、戦後すぐに審議会等を設立して新制への検討を始め、48年までには文部省へ設置認可申請を提出していたことが窺える。このように、他大学の事例からも多くの示唆を得ることができ、有意義な研究会であった。

今後は、本研究会での報告や成果を基に図書館エントランス展示をする等、2019年の新制「大谷大学」誕生70周年に向けて、学内全体の機運を高めていきたいと思う。



全国研究会の総括討論

歎異抄ワークショップ開催報告

第二回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ開催報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師 Michael J. Conway

2017年3月、真宗総合研究所は、『歎異抄』の注釈史を含めた全体像が読み取れる詳細な翻訳書の作成に向けて、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所、龍谷大学世界仏教文化研究センターと協定を結び、共同研究プロジェクトを立ち上げた。今後5年間に10回、幅広い層の研究者が集う翻訳研究ワークショップを開催する計画である。

2017年8月4日(金)から7日(月)まで、本学を会場にその第2回ワークショップが、国際仏教研究班の主導で開催された。日によって変動はあったが、およそ25名の研究者が慶聞館4階の教室およびマルチスペースを利用して小グループの翻訳作業を行い、円智の『歎異抄私記』、寿国の『歎異抄可笑記』、深励の『歎異抄講義』および『歎異抄講林記』、了祥の『歎異抄聞記』および『歎異抄法話』という江戸期の代表的注釈書の解説に努めた。それに加えて、近現代の『歎異抄』解釈に関する5名の研究発表も行われた。

協定を結んだ三校の教員と大学院生が参加者の半数を占めていたが、アメリカの大学教員、日本で活躍している若手研究者、東西両本願寺の開教活動に携わっている方も来られて、多様な視点と豊富な経験によって翻訳作業に寄与した。

8月4日の午前中に参加者全員がK404教室に集まり、私から第1回ワークショップについて報告した上で、このワークショップで取り扱っているテキストの著者とそれぞれの時代背景について紹介した。その後、全体で議論をして、仮に『歎異抄』第1条の英訳を確定した。



第1条の英訳を確定している様子

午後からは、4つの翻訳部会に分かれて、江戸期の注釈書の翻訳作業に取りかかった。井上尚実教授（国際仏教研究班研究代表者）が了祥の部会で指揮を取り、マーク・ブラム教授（カリフォルニア大学バークレー校、国際仏教研究班嘱託研究員）が円智の部会、嵩満也教授（龍谷大学）が寿国の部会、私が深励の部会をそれぞれ担当した。各部会には、8名ほどが参加し、一人の書記担当者を決めて、パソコンに翻訳を入力し、その画面をプロジェクターで映し出し、全員が翻訳について議論を展開していった。全日程を通して翻訳のセッションが中心となり、休憩を適宜挟みながら、翻訳作業が進められた。

本プロジェクトの射程は近世の『歎異抄』解釈に留まらず、近現代にまでどのようにその書が捉えられてきたかを明らかにしようとしているので、5日と6日の午後のセッションには、近代日本および英語文化圏における本書の注釈および翻訳について研究発表が行われた。5日に鶴留正智氏（本学大学院修士課程真宗学専攻第2学年）が近角常観の『歎異抄』の注釈書を紹介し、そして和田良世氏（本学大学院修士課程真宗学専攻第2学年）が梶鳥敏の『歎異抄』の注釈書を紹介した。6日に私が曾我量深の『歎異抄聴記』について発表し、釈智志氏（龍谷大学大学院真宗学専攻第2学年）が梅原真隆の『歎異抄』理解について発表した。そしてエイミー・ウメズ氏（米国仏教学院科目等履修生）が『歎異抄』の英訳史について発表した。

台風の接近に伴い、最終日7日が中止となる可能性があったため、6日の最後のセッションで、各部会からの今回の翻訳成果の発表が行われ、それぞれの部会で議論となったこと、翻訳作業で明らかになった課題などについて報告がなされた。7日の午後のセッションはやはり台風の影響で中止となったが、午前中に全員で集まり、2017年3月にバークレーで予定されている第3回ワークショップについて計画を立てた。

今回も参加者全員にとって、多くの刺激と示唆を得る有意義な機会となったように思われる。回を重ねることによって、互いに『歎異抄』および真宗の教義と歴史に対する理解が深まることが期待される。

公開講演会・公開研究会

東京分室主催公開研究会 「伝統仏教と臨床仏教」開催報告

東京分室PD研究員 藤原 智

2017年8月29日(火)16時から、第3回「宗教と人間」研究会を親鸞仏教センター5Fで開催した。テーマは「伝統仏教と臨床仏教」、講師には臨床仏教研究所研究員・大正大学非常勤講師の吉水岳彦氏をお招きした。

講師の吉水氏は、2015年に『靈芝元照の研究—宋代律僧の浄土教』（法藏館）を刊行した若手の気鋭の仏教研究者である。それと共に、「慈しみに満ちた社会をめざして」という願いのもとに設立された社会事業委員会「ひとさじの会」の事務局長として、社会支援事業に積極的に取り組み、その中から現代の仏教者の役割というものを考えておられる。その吉水氏に、ご自身の実践をとおして、現代日本社会における宗教性について、また仏教者のありかたというものについてお話をいただき、その後一般の参加者も交えて議論を行った。以下、吉水氏の講演を要約する。

吉水氏は、まず仏教者の社会活動についての近年の状況について、2011年の東日本大震災以後に極めて注目されるようになったと押さえられた。それまでは、社会活動に対しては否定的意見が多かったという。その状況が大震災によって一変し、注目を受けるようになってきた。しかし社会問題は急に出てきたのではなく、例えば「無縁社会」と呼ばれるような問題は震災以前から存在していた。大震災において社会をクローズアップして見る視点が与えられたのだ、と指摘された。

大震災において人々が感じたもの、それは「絶対のものはない」ということ。そしてそこに応えられるのは宗教しかないのではないか。こうして世間的にも大震災を契機に揺るぎないものを求め始めたといえる。

ただし、そこで求められている仏教とは一体何か、と吉水氏は問題提起された。それは、いわゆる新宗教といったものとの違いはあるのだろうか。では、日本の伝統仏教の特色とは何か。こういう問いかけのもと、吉水氏はそれを「上求菩提・下化衆生」という大乘精神に求め、より端的に「他者とのかわりによる自己完成」と押さえられた。そして、現在の「臨床仏教」とはその再認識を促すものであり、単なる社会参加する仏教ではなく、社会の諸事象に密接にかかわり、かつ自己の内面に密接にかかわるものである。こうして伝統仏教と臨床仏教との目指すところは重なっているものであり、現実の苦に真っ直ぐに向き合うということが大切なのだ、とお話しされた。

その後の質疑応答では、活動の中で教えを伝えることはないのか、臨床仏教師養成の中で内面に向き合うようなことはあるのか、臨床仏教師の目的は何か、仏教に限定するのは何故か、文献学との関係をどのように捉えているのか等、参加者の様々な視点から意見がだされ、非常に活発な議論が行われた。その最後に吉水氏は、若松英輔氏の「苦しむ者は、多く与える者である。支える者は、恩恵を受ける者である。」（『魂にふれる—大震災と、生きている死者—』215頁、トランスビュー、2012年）という言葉を紹介し、自分が感じていることはこの言葉に表れていると述べられ、研究会は閉じた。

吉水氏の実践をとおして見出された知見に、大きな感銘と啓発を受けた有意義な会であった。



講師の吉水氏



研究会の様子

モンゴル国立大学との共同研究会報告

西藏文献研究 研究員・教授 松川 節

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期(13～17世紀)の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的的研究」の一環として、2017年6月18日～6月25日までモンゴル国立大学総合科学部のP. デルゲルジャルガル副学部長を大谷大学に招聘し、共同研究を行った。6月23日(金)16:30～18:00に慶開館K407教室にて西藏文献研究班主催で公開講演会を開催し、P. デルゲルジャルガル氏の講演「匈奴の宗教信仰——仏教の伝播——」を拝聴した。

講演は、1) 匈奴における自然崇拜 2) 祭祀 3) 仏教の伝播 4) 拓跋・鮮卑・北魏の仏教 5) 匈奴と西域の関係・影響 6) 匈奴の西域政策 7) 西域のための匈奴・漢の抗争 8) 結論 から成る。「仏教の伝播」と「結論」の部分をもとめると以下のとおりであった。

漢文史料と考古遺物より、匈奴の信仰は、天の崇拜、シャマニズムであったとみなしてよからう。しかし、匈奴帝国が拡張し、東トルキスタン、中央アジアを支配し、シルクロードを単独で統括するようになったころから仏教の影響が入ってきたとみなすことができる。匈奴帝国がユーラシアと関係をもっていた点で、シルクロードを介して中央アジア、近東、西洋のグレコ・バクトリア王国、ローマ帝国とも広範な関係があったことを考古遺物は証明している。それゆえ、このような通商の道によって仏教が伝播した可能性は大いにある。

19～20世紀のモンゴル僧ザワー・ダムディン・ガブジは『アルタン・デフテル』という自著においてモンゴルの地に仏教が伝播した歴史を初伝期・中伝期・後伝期という三期に時代区分して記述し、初伝期は匈奴帝国時代にインドからリ(コータン)、中央アジアを経由してモンゴルの地に仏教が伝播したとみな

した。ザワー・ダムディンは、「中国・チベットの地に宗教が伝播するよりもずっと以前にモンゴルの地に仏教が伝播したことは明らかである。チベットよりも以前に中国の地に宗教が伝播した歴史は、非常に広範にわたる。一方、モンゴルの地に中国よりも以前に宗教が伝播した歴史は、中国の地に宗教が将来される以前に、先述した秦王の時代から中国とモンゴル両者が土地を奪い合い争いあった時代に中国の軍はモンゴルの地の寺院を破壊し、寺や御神体を廃焚するなど不快な多くの行いをなしていたことについて、『化身の鏡』という漢・モンゴル・満洲語の文献に説かれている。漢王の時代に中国人がモンゴル人から奪った土地にあったモンゴルの若干の古い寺院は、今や中国の寺院となった…」と述べている。ザワー・ダムディン・ガブジのモンゴルの地に宗教が伝播した時代区分・時代認識を、現在、モンゴルの研究者たちは基本的に容認している。

前121年に漢の霍去病は青海・甘粛における匈奴の休屠王を撃破し、18,000人以上を殺し、休屠王の祭金の金を奪い取ったことについて『史記』の匈奴伝に記載されている²。匈奴の休屠王の「金人」について研究者の見解は一致していない。研究者の中には「シャマンの霊」とか仏像といった解釈がある。しかし、モンゴルの多くの学者たちは匈奴の「金人」を仏陀像であったらうという見解を支持している。

匈奴時代に仏教が広範に流布したという史料は無い。しかし鮮卑の時代にモンゴルの地に仏教が広範に流布し、国教になったことを、史書と考古学的証拠は証明する。

G. スフバートルは、「ニルン(柔然)国のカガン(王)は、凡そ438～489年の時代に仏教の經典、アビダルマ、サンクヒヤ哲学を説き知る僧侶ダルマブリヤ【達摩摩利?】を国師に奉戴し、3,000戸を賜った」とする漢文史料に基づき、柔然国で仏教が国教になったとみなしている³。

1. Зава Дамдин Лувсандаян. *Их Монгол оронд бурханы шашин дэлгэсэн түүх "Алтан дэвтэр"*. Түвэд хэлнээс орчуулсан С.Гантөмөр. УБ., 2014. т.46.
2. 『史記』第110卷. 第2908頁。「其明年春、漢使驃騎將軍去病將萬騎出隴西、過焉支山千餘里、擊匈奴、得胡首虜(騎)萬八千餘級、破得休屠王祭天金人。」
3. Г.Сүхбаатар. *Монгол Нирун улс*. УБ., 1992. т.129



デルゲルジャルガル先生

中国社会科学院歴史研究所との 学術交流協定に基づく公開研究会報告

国際仏教研究（東アジア班）研究員・准教授 井黒 忍

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動の一環として、同研究所より4名の研究者を招聘し、2017年9月28日(木)に響流館4階真宗総合研究所ミーティングルームにおいて公開研究会を実施し、研究発表および討論を行った。

研究会では3名の発表者による研究発表が行われ、田波氏（中国社会科学院歴史研究所副所長）によりコメントが述べられた。まず1人目の発表者と発表テーマは、鄒文玲氏（中国社会科学院歴史研究所戦国秦漢史研究室副主任、研究員）「簡牘に見る漢代の契約文書」である。竹や木を材料とする簡牘は漢代に書写材料として紙が出現した後にもすぐに淘汰されることなく、4世紀末の東晋末年に至るまで数百年の間、紙と共存した。古代の記録である簡牘の発見は、20世紀の中国における重要な考古学の成果であり、現在までにおよそ40万枚が見つかっている。代表的なものとして、郭店楚簡、雲夢睡虎地秦簡、居延漢簡、長沙走馬楼三国呉簡、郴州晋簡があり、それぞれ西北辺境の要塞やのろし台の遺跡、墓や古井戸、貯蔵穴などから発見された。内容から見ると典籍と文書の二種に大別され、うち80パーセントが文書であり、その作成時期は戦国、秦、漢から三国、魏晋時代におよぶ。文書の一つである契約の最も早い事例は西周時代に遡る。当時すでに売買契約、貸借契約、贈与と取授に関する契約などがあり、漢代にはさらに整備された姿を見せる。

2人目の発表者と発表テーマは、陳爽氏（中国社会科学院歴史研究所魏晋南北朝隋唐史研究室研究員）「出土墓誌に見る嫡庶の表記法と南北朝における嫡庶問題」である。従来の研究によれば、嫡庶の差は南北朝時代における南北の社会の差異を表す重要な指標の一つであり、北方で「嫡庶の別が重んじられ、庶出は疎んじられた」のに対して、南朝では「嫡庶の別を重んじない」とされてきた。本報告では、墓誌資料と典籍資料とを資料源とし、特に南北朝時代の墓誌に見える系譜に嫡庶がいかにかに記されるかという点に着目して、南北朝の嫡庶問題に関して新たな見解を提示する。「嫡出を重んじて庶出を軽んじる」という考えは、古代社会の歴史的伝統であり、南北朝時代においても基本的には変わらないものであった。この時期の南北社会の主な違いは嫡庶の別ではなく、嫡庶の争いにあった。

南朝の礼法体系においては嫡庶の身分と地位とは確定的であり争いが少なかったのに対して、北朝の嫡庶の争いは南朝より数段激しかった。これは北朝社会において頻繁に見られた「後娶」という行為により家族の継承関係が不確定的となったためであり、嫡庶の争いは家族の中での緊張関係を生み出すとともに、北朝社会に特有の歴史現象となった。

3人目の発表者と発表テーマは、鄭任釗氏（中国社会科学院歴史研究所中国思想史研究室副主任、副研究員）「『春秋公羊伝』復仇説の主旨」である。『春秋公羊伝』は『春秋』を注解した著作であり、春秋三伝、ないしは儒家の經典の中でも極めて異彩を放つ。漢代に『公羊伝』を解説した何休が疑義を呈したように、『公羊伝』の理論は公羊学が盛んであった漢代において、すでに多くの公羊学者を困惑させていた。復仇論は『公羊伝』の独特な理論の一つである。『公羊伝』における仇討ちの推奨は、先秦期の儒家の剛毅な性格を現しているが、一方で仇討ちには種々の制限が設けられており、一種の理性的な精神をも示している。『公羊伝』には仇討ちという行為が持つ破壊性が見て取れるのと同時に、平和を乱し、社会の基本となる身分関係を破壊しようとするよこしまな意図や悪行を未然に抑制する作用が期待されたのである。これは仇討ちという行為に規範を加えようとしてきた努力を示すものであり、『公羊伝』は根本的には儒家の倫理と社会秩序を維持するためのものであった。



研究会の様子

特定研究 研究会報告

大江則成氏 (真宗大谷派企画調整局次長)「真宗大谷派寺院の現状と課題・展望」 大谷栄一氏 (佛教大学・教授)「「地域社会と寺院」をめぐる現状と課題」

新しい時代における寺院のあり方研究 研究員・講師 藤元 雅文

本研究班では「新しい時代における寺院のあり方研究」の名のもと、人口減少による少子高齢化など、厳しい状況に立ち至っている地域と、そこに立地する寺院の課題や役割について研究をすすめていくことを目的としている。本年度立ち上げられた当研究班にとって、当該テーマに関する現状を把握し課題等を明確化しつつ、先行的な取り組み事例や現在までの研究成果などに対する知見を得ることは非常に重要である。そのような趣旨のもと、2017年度前期においては2人の学外講師をお招きし、研究会を開催した。

第一回目の研究会は2017年5月15日に真宗大谷派企画調整局次長・大江則成氏をお招きし、「真宗大谷派寺院の現状と課題・展望」というテーマのもと講演および質疑応答という形で開催された。大江氏は、様々な状況に置かれている真宗大谷派の寺院がいかに活性化していけるかという課題に最前線で取り組まれており、その取り組み内容は本研究班と多く課題を共有している。それゆえ、本学と最も関係の深い真宗大谷派の寺院の現状と課題、今後の展望等を大江氏から学ぶことを通して、本研究の方向性や具体的な研究方法を考察する足掛かりを見出すことのできた研究会となった。

大江氏の講演内容を以下簡潔に紹介する。氏はまず人口減少による寺院とご門徒との関係、法務執行の変化など具体的な影響をデータに基づき紹介された。その上で、第7回教勢調査(2012年10月実施)から見える教勢の現状および課題、現在大谷派にて取り組まれているプロジェクトなどを包括的に報告する内容の講演であった。その中で、今回の教勢調査では前回に比べ相対的に教勢は減衰傾向にあるが、一方で過疎を含む地域寺院の活動は顕著であること等、本研究班においても殊に注目すべき内容を教えていただいた。また講演後には質疑応答が行われ、他宗派や各研究機関の取り組み状況、過疎問題に関する大谷派と他機関等との協力関係、あるいは現代の日本人の宗教意識と真宗の教えとの関係などに関して、活発な議論が繰り広げられた。

第二回目の研究会は、2017年6月23日に佛教大学教授・大谷栄一氏を招いて「「地域社会と寺院」をめぐる現状と課題」というテーマのもと開催された。大谷氏は宗教社会学、近代仏教研究という幅広い分野を研究対象としているが、昨今「地域社会と寺院」に関しても積極的な研究活動を行う有識者として広く認知されている。

大谷氏の講義内容の構成は、「【1】今、何が問題か?～寺院をめぐる現状～」【2】「地域社会と寺院」という問題【3】伝統教団の過疎問題対策【4】浄土宗の過疎地域寺院調査【5】浄土宗滋賀教区での質問紙調査【6】今後の課題」であった。この研究会で大谷氏は、寺院をめぐる現状について人口減少がすすみ地域社会の存続が困難になる中、「寺院消滅」の可能性が多くの地域で現実化する状況であることを幾つかの研究者等の成果をもとにまず示した。次に寺院を支える社会基盤の変動や、それをとりまく日本の社会変動を踏まえ、伝統教団の過疎問題対策の歴史を振り返りつつ、現在の諸教団の取り組みを紹介された。また、様々な施策が各宗派にて講じられているが「特効薬はない」と課題の複雑さを明確に指摘された。さらに寺院調査のデータに基づきながら、寺院と檀信徒との紐帯はどのような事柄と関連があるか、寺院活動を規定する指標とはどのようなものか等、具体的に地域社会と寺院との関わりを見ていく際のキーワードを提示いただいた。講義の最後には「過疎問題への処方箋」など具体的な問題と提言に踏み込んで言及された。その後の質疑も講義の内容と同様、多様な問題にわたって展開し、たとえば「コンパクトシティ」という発想の問題点などについて活発な議論が交わされる中で研究会を閉じる形となった。

真宗総合研究所彙報 2017. 4. 1 ~ 2017. 9. 30

■研究所関係

○研究所委員会

◇2017年 5月 8日(月) 12:15~12:35 (博綜館第5会議室)

1. 特別研究員の人事について
2. 2017年度研究組織について
3. その他

◇2017年 7月 18日(火) 12:15~12:30 (博綜館第3会議室)

1. 特別研究員の新規委嘱について
2. 研究組織の変更について
3. その他

○2017年度第1回研究員総会

2017年 7月 28日(金) 16:00~17:00 (慶聞館K211教室)

1. 研究所長挨拶
2. 研究所主事・事務局からの連絡事項
3. 意見交換

新しい時代における寺院のあり方研究

【(予備)調査】

日 時：2017年 6月 30日(金)

場 所：大垣教区第八組 発心寺

内 容：岐阜県揖斐郡揖斐川町における寺院および地域に関する聞き取り調査

参加者：東館紹見 徳田剛

【共同調査への参加】

日 時：2017年 8月 25日(金)~ 28日(月)

場 所：石川県七尾市に所在する寺院(詳細は下記)
：常光寺(真宗大谷派) 覚永寺(真宗大谷派)
大覚寺(曹洞宗) 徳照寺(本願寺派)

内 容：上記寺院に関する聞き取り調査

参加者：徳田剛 磯部美紀

【学外講師による研究会】

◇第1回

日 時：2017年 5月 15日(月) 18:00 ~ 19:30

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

講 師：大江則成氏(真宗大谷派企画調整局次長)

講 題：「真宗大谷派寺院の現状と課題・展望」

参加者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文、本林靖久、松岡淳爾、磯部美紀

◇第2回

日 時：2017年 6月 23日(金) 18:00 ~ 19:30

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

講 師：大谷栄一氏(佛教大学・教授)

講 題：「『地域社会と寺院』をめぐる現状と課題」

参加者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文、本林靖久、松岡淳爾、磯部美紀

【記者懇談会での発表】

日 時：2017年 8月 3日(木) 14:00 ~ 15:00

会 場：慶聞館K314教室

発表者：木越康、徳田剛

内 容：「新しい時代(過疎化・高齢化)における寺院のあり方研究」予備調査の概要

【ミーティング】

◇第1回

日 時：2017年 4月 3日(月) 15:00 ~ 16:30

出席者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：特定研究設置の目的および課題について

◇第2回

日 時：2017年 4月 18日(火) 14:40 ~ 16:10

出席者：東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：特定研究の課題整理

先行研究、参考資料について

◇第3回

日 時：2017年 5月 9日(火) 14:40 ~ 16:10

出席者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：特定研究の課題

第一回学外講師研究会について

◇第4回

日 時：2017年 5月 30日(火) 14:40 ~ 16:10

出席者：東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤

元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：先行研究の紹介
調査、研究の進め方について

◇第5回

日 時：2017年6月13日(火) 14:40～16:10

出席者：東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤
元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：予備調査における調査内容の検討

◇第6回

日 時：2017年7月4日(火) 14:40～16:10

出席者：東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤
元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：予備調査に関する報告

◇第7回

日 時：2017年7月25日(火) 15:30～17:00

出席者：東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤枝真、藤
元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：今後の調査内容にむけての検討

◇第8回

日 時：2017年8月31日(木) 13:00～14:30

出席者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤
枝真、藤元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

内 容：本調査にむけて
真総研紀要投稿について
能登調査参加報告

◇第9回

日 時：2017年9月7日(木) 16:30～18:00

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

出席者：木越康、東館紹見、山下憲昭、徳田剛、藤
枝真、藤元雅文、松岡淳爾、磯部美紀

内 容：本調査打ち合わせについて
紀要論文について

国際仏教研究

<英米班>

【国内出張】

◇第18回国際真宗学会 (IASBS) 学術大会

2017年6月30日(金)～7月2日(日) (於 武蔵野大学)

参加者：井上尚実研究員と東真行(真宗学科助教)、
川口淳(真宗学科助教)、ジェフ・シュローダー(オ
レゴン州立大学)の特別招聘者3名が「真宗大谷派
近代教学における‘利他’‘Benefiting Others’ in
Modern Shin Buddhist Doctrinal Studies of the
Ōtani-ha」というテーマの大谷大学パネルで研究発
表。Robert F. Rhodes研究員、Michael J. Conway
研究員、James C. Dobbins囑託研究員、Mark L.
Blum囑託研究員が別のパネルで発表。

【海外出張】

◇第18回国際仏教学会 (IABS) 学術大会

2017年8月20日(日)～25日(金) (於 カナダ、トロン
ト大学)

上野牧生講師(短期大学部仏教科、特別招聘)と梶
哲也研究補助員(博士後期課程3年)が研究発表。

◇第15回ヨーロッパ日本研究協会 (EAJS) 国際会議
2017年8月30日(水)～9月2日(土) (於 ポルトガル、
リスボン)

Michael J. Conway研究員とMelissa Curley教授
(オハイオ州立大学、特別招聘)が研究発表。

◇「南都浄土教」ワークショップ

2017年9月29日(金) (於 カナダ、マギル大学)

Robert F. Rhodes研究員が応答者として参加。

【会議】

◇国際仏教研究 全体会

①2017年4月26日(水) 18:00～19:30 (於 真宗総合研
究所内ミーティングルーム)

2017年度の活動計画確認。

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J.
Conway、新田智通、井黒忍、梶哲也、常
塚勇哲

②2017年9月13日(水) 13:00～14:30 (於 真宗総合
研究所内ミーティングルーム)

2017年度後期の活動計画確認。

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J.
Conway、新田智通、梶哲也、常塚勇哲

◇『歎異抄』翻訳研究ワークショップ関係のミーティング

①2017年5月3日(水) 16:20～18:00 (於 真宗総合研
究所内ミーティングルーム)

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J.
Conway、梶哲也、常塚勇哲

②2017年6月7日(水) 16:20～17:50 (於 真宗総合研

研究所内ミーティングルーム)

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲

③2017年7月5日(水) 16:20～17:50 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

参加者：井上尚実、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲

④2017年7月26日(水) 16:20～17:50 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、梶哲也

⑤2017年8月3日(木) 10:00～12:00 (於 真宗総合研究所内フリースペース)

参加者：Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲

⑥2016年9月12日(火) 14:00～15:30 (於 真宗総合研究所内フリースペース)

参加者：井上尚実、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲、龍谷大学より4名

【研究会】

◇国際真宗学会大谷大学パネルのための研究会

①2017年4月18日(火) 10:40～12:10 (於 総合研究室内 フリースペース)

参加者：井上尚実、東真行(真宗学科助教)、川口淳(真宗学科助教)

②2017年6月20日(火) 10:40～12:10 (於 総合研究室内 フリースペース)

参加者：井上尚実、東真行、川口淳

◇『教団のあゆみ』英訳研究会

①2017年6月8日(木) 14:30～16:10 (於 真宗総合研究所内ミーティングルーム)

参加者：阿満道尋(モンタナ大学准教授、嘱託研究員)、井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲

②2017年6月15日(木) 14:30～16:10 (於 響流館4階会議室)

参加者：阿満道尋、井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲

【ワークショップ】

◇『歎異抄』翻訳研究ワークショップ

2017年8月4日(金)～7日(月)10:00～17:30 ※7日は台風の影響で午前からの開催
(於 慶聞館4階、K401～K404教室)

参加者：井上尚実、Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、梶哲也、常塚勇哲、加来雄之、東真行

上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

<東アジア班>

【研究会】

◇中国社会科学院歴史研究所との学术交流協定に基づく研究会

2017年9月28日(木) (於 響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)

中国社会科学院歴史研究所より4名の研究者を招聘し、公開研究会を実施。研究発表および討論を行った。3名の発表者と発表テーマは、以下の通りである。
鄔文玲氏(中国社会科学院歴史研究所戦国秦漢史研究室副主任、研究員)

「簡牘に見る漢代の契約文書」

陳爽氏(中国社会科学院歴史研究所魏晉南北朝隋唐史研究室研究員)

「出土墓志に見る嫡庶の表記法と南北朝における嫡庶問題」

鄭任釗氏(中国社会科学院歴史研究所中国思想史研究室副主任、副研究員)

「『春秋公羊伝』復仇説の主旨」

3氏の発表終了後には田波氏(中国社会科学院歴史研究所副所長)によりコメントが述べられた。

西藏文献研究

【海外出張】

◇8月19日(土)～8月30日(水)

場 所：モンゴル国ゴビアルタイ県

目 的：ゴビアルタイ県に建立されたゲルク派伝播初期の寺院・考古遺物に関する野外調査

出張者：松川節

【共同研究会】

◇6月23日(金) 16:30～18:00 於 慶聞館K407教室

講 師：P. デルゲルジャルガル(モンゴル国立大学総合科学部副学部長、当研究班嘱託研究員)

テーマ：匈奴の宗教信仰：仏教の伝播

【嘱託研究員招聘】

◇6月10日(土)～6月11日(日)

高本康子(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員、当研究班嘱託研究員)

招聘理由：寺本婉雅関係資料の今後の研究方針打ち合わせのため

◇6月18日(日)～6月25日(日)

P. デルゲルジャルガル (モンゴル国立大学総合科学部副学部長・当研究班嘱託研究員)

招聘理由: モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究に伴う学術交流のため

◇6月7日(水)、6月23日(金)

伴真一郎氏 (当研究班嘱託研究員)

招聘理由: モンゴル国立大学との研究協力協定に基づく共同研究に伴う学術交流活動と、寺本婉雅将来『モンゴル仏教史』モンゴル版の校訂作業のため

【研究員打ち合わせ】

場 所: 真宗総合研究所ミーティングルームほか
内 容: 研究班の運営・企画・諸問題に関する調整
開催日: 4月20日(水)、5月11日(水)、6月8日(水)、7月13日(水)

ベトナム仏教研究

【打合せ等】

『日本仏教概説』執筆者の内、原稿未提出者に継続的に督促した。その結果、ほとんどの原稿を整えることができた。

【海外出張】

◇6月17日(土)～6月21日(水)

出張者: 織田顕祐、加藤丈雄所長

目 的: 両組織の責任者交替により、今後の共同研究のあり方を改めて確認するため。

【研究会】

◇5月15日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
研究会の進め方などについて

◇6月12日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
『禪苑集英』読解研究

◇6月26日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
『禪苑集英』読解研究

◇7月10日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
『禪苑集英』読解研究

◇7月24日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
『禪苑集英』読解研究

◇9月25日(月) 13:00～14:30(真総研ミーティングルーム)
『禪苑集英』読解研究

大谷大学史資料室

【研究会参加】

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2017年度総会・第1回研究会

日 程: 2017年5月23日(火)

場 所: 立命館大学 衣笠キャンパス

参加者: 松岡智美・老泉量

◇全国大学史資料協議会西日本部会 2017年度第2回研究会

日 程: 2017年8月1日(火)

場 所: 神戸女学院大学

参加者: 松岡智美・老泉量

【ミーティング】

◇2017年5月9日(火) 14:00～16:00

出席者: 松浦典弘・松岡智美・老泉量

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 2017年度の活動計画の確認、図書館エントランスの展示に向けた概要など。

◇2017年6月26日(月) 15:00～15:30

出席者: 松浦典弘・松岡智美・老泉量

場 所: 真宗総合研究所

内 容: 図書館エントランスの展示内容報告など。

◇2017年6月30日(金) 10:30～12:00

「大谷大学を支えた人物 ―第十一代学長 関根仁応―」

展示準備及び前回展示の撤収

参加者: 松岡智美・老泉量

場 所: 大谷大学図書館入口展示スペース

◇2017年9月21日(水) 9:00～9:30

「大谷大学を支えた人物 ―第十一代学長 関根仁応―」の展示撤収

参加者: 松岡智美・老泉量

場 所: 大谷大学図書館入口展示スペース

上記活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

デジタル・アーカイブ資料室

【海外出張】

- ◇第18回国際仏教学会 (IABS) 学術大会
日 程：2017年 8月20日(土)～ 25日(金)
場 所：カナダ・トロント大学
参加者：清水洋平

■東京分室

東京分室指定研究

【出張】

- ◇2017年 7月24日(月)～ 8月 2日(水)
出張先：タイ・ボケオ行政区
用 務：カレン村落でのフィールド調査。
出張者：田崎郁子

【研究会】

- ◇2017年 4月11日(火)
内 容：バリ語文献を中心とした初期仏教の研究
発表者：稲葉維摩

- ◇2017年 4月18日(火)
内 容：2017年度共同研究の企画立案

- ◇2017年 5月 9日(火)
内 容：プロテスタント・キリスト教との接触によるローカルな心的概念の再編
発表者：田崎郁子

- ◇2017年 5月16日(火)
内 容：レビュー：近代における真宗学の問い直しについて
発表者：藤原智

- ◇2017年 5月23日(火)
内 容：自己認識への道：禅仏教とマイスター・エックハルト
発表者：松澤裕樹

- ◇2017年 5月30日(火)
内 容：バリ語の直説法現在とアオリスト
発表者：稲葉維摩

- ◇2017年 6月20日(火)
内 容：東南アジアからのアジア社会論
発表者：田崎郁子

- ◇2017年 6月27日(火)
内 容：「教行信証」撰述研究史についての研究
発表者：藤原智

- ◇2017年 8月22日(火)
内 容：人間神化と関係的存在論
発表者：松澤裕樹

- ◇2017年 9月13日(水)
内 容：意味内容に基づいたバリ語sakkaya-に対する考察
発表者：稲葉維摩

- ◇2017年 9月27日(水)
内 容：近世大谷派における『教行信証』研究の一側面
発表者：藤原智

【公開研究会】

- ◇2017年 8月29日(火) 16時～ (親鸞仏教センター 5Fセミナー室)
第3回「宗教と人間」研究会
吉水岳彦氏 (臨床仏教研究所研究員、大正大学非常勤講師)
「伝統仏教と臨床仏教」

個人研究田崎班

【出張】

- ◇2017年 5月12日(金)
出張先：京都大学アジア・アフリカ地域研究科
用 務：東南アジアの社会と文化研究会への参加
出張者：田崎郁子

- ◇2017年 5月27日(土)
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用 務：東南アジア学会関西地区例会への参加
出張者：田崎郁子

- ◇2017年 5月31日(水)
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用 務：第26回ゾミア研究会への参加
出張者：田崎郁子

- ◇2017年 7月 7日(金)
出張先：京都大学東南アジア地域研究研究所
用 務：Prof. Charnvit Kasetsiriによる特別セミナーへの参加

出張者：田崎郁子

個人研究藤原班

【出張】

◇2017年4月25日(火)

出張先：学士会館

用務：親鸞仏教センターのつどい参加

出張者：藤原智

◇2017年5月2日(火)

出張先：真福寺

用務：智山勸学会シンポジウム「宗学を問い直す」
パネル参加

出張者：藤原智

◇2017年6月10日(土)

出張先：龍谷大学大宮学舎

用務：真宗連合学会第六十四回大会参加

出張者：藤原智

◇2017年6月30日(金)～2017年7月2日(日)

出張先：武蔵野大学武蔵野キャンパス

用務：第十八回国際真宗学会参加

出張者：藤原智

◇2017年7月22日(土)

出張先：東洋大学白山キャンパス

用務：平成29年度第2回東アジア仏教研究会参加

出張者：藤原智

◇2017年9月2日(土)～2017年9月3日(日)

出張先：花園大学

用務：日本印度学仏教会第68回学術大会参加・発表

出張者：藤原智

◇2017年9月17日(日)

出張先：しんらん交流館

用務：第24回真宗大谷派教学大会参加・発表

出張者：藤原智

個人研究松澤班

【出張】

◇2017年6月24日(土)

出張先：東京大学駒場キャンパス

用務：第160回教父研究会への参加・発表

出張者：松澤裕樹

◇2017年9月16日(土)～17日(日)

出張先：東京大学本郷キャンパス

用務：日本宗教学会第76回学術大会への参加

出張者：松澤裕樹

■一般研究出張関係

一般研究柴田班

◇2017年8月11日(金)～21日(月)

出張先：(1) 大英博物館 (British Museum)

(2) 大英図書館 (British Library)

(3) 英国紋章院 (College of Arms)

(4) ロンドン市内の聖堂及び書店 他

用務：イギリスの紋章の構造に関する現地調査

出張者：柴田みゆき、三浦誉史加、杉山正治

◇2017年8月22日(火)～25日(金)

出張先：(1) 国立国会図書館 (2) 宮内庁書陵部 (3) 国立公文書館東京本館 (4) 早稲田大学中央図書館 (5) 東京国立博物館 (6) 江戸東京博物館

用務：本邦における円形系図とその周辺資料に関する調査

出張者：生田敦司、横澤大典

◇2017年9月16日(土)～19日(火)

出張先：(1) 大谷大学 (2) 嵯峨釈迦堂清涼寺

用務：本邦における円形系図調査のための勉強会

出張者：柴田みゆき、松浦亨、生田敦司、横澤大典

一般研究武田班②

◇2017年9月22日(金)～23日(土)

出張先：東北大学大学院生命科学研究科

用務：科研班成果物編集の打ち合わせのため

出張者：武田和哉

一般研究上田班

◇2017年5月12日(金)～13日(土)

出張先：東京ビッグサイト、国立情報学研究所

用務：情報セキュリティ EXPOおよび第22回教育学習支援情報システム (CLE) 研究発表会への参加

出張者：上田敏樹

◇2017年7月21日(金)

出張先：ザ・プリンス パークタワー東京

用務：「SoftBank World 2017」への参加

出張者：上田敏樹

◇2017年8月25日(金)

出張先：法政大学 新一口坂校舎
用 務：SWIM（ソフトウェアインタプライズモデリング）研究会への参加
出張者：上田敏樹

一般研究松川班

◇2017年4月26日(水)～29日(土)、5月4日(木)～7日(日)
出張先：モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所、
ガンダン寺学術文化研究所、モンゴル国際
遊牧文明研究所、モンゴル国立大学
用 務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査・
研究
参加者：松川節

◇2017年8月7日(月)～16日(水)

出張先：モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所
用 務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査・
研究
出張者：松川節

◇2017年9月8日(金)～10日(日)、19日(火)～28日(木)

出張先：モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所
用 務：モンゴル国における山岳信仰に関する調査・
研究
出張者：松川節

一般研究鈴木班

◇2017年8月25日(金)～9月1日(金)
出張先：a. 大雪クリスタルホール
b. 仁頃層群分布域
用 務：a. 地学団体研究会総会・シンポジウム出席・
小樽巡検参加（8/25～8/28）
b. 北海道東部の地質と文化に関する現地
調査（8/29～9/1）
出張者：鈴木寿志

一般研究田中潤一班

◇2017年7月27日(木)～30日(日)
出張先：国立台湾師範大学（National Taiwan
Normal University）
用 務：International Association of Japanese
Philosophy（国際日本哲学会）で発表
出張者：田中潤一

◇2016年8月18日(金)～19日(土)

出張先：喫茶室ルノアール秋葉原電気街口店 貸会議室
用 務：第53回デイルタイ・テキスト研究会
出張者：田中潤一

一般研究田中正隆班

◇2017年8月1日(火)～9月11日(月)
出張先：ベナン国内ラジオ各局（コトヌ）、トーゴ国内ラジ
オ各局（ロメ）、フランス国立図書館（パリ）ほか
用 務：科研費海外調査による現地一次資料の収集
出張者：田中正隆

一般研究井黒班

◇2017年7月23日(日)
出張先：東京大学農学部1号館3階 農経会議室
用 務：第19回環境史研究会ワークショップ
出張者：井黒忍

一般研究西沢班

◇2017年4月24日(月)～27日(木)、5月16日(火)～19日(金)、6月
5日(月)～9日(金)、26日(月)～30日(金)、7月24日(月)～
28日(金)
出張先：大谷大学
用 務：チベット古文書学研究会開催のため
出張者：西沢史仁

◇2017年8月19日(土)～27日(日)

出張先：トロント大学
用 務：第十八回国際仏教学会（IABS）への参加
出張者：西沢史仁

一般研究森班

◇2017年8月1日(火)～6日(日)
出張先：University of Auckland
用 務：The 13th ISKS International Conference
of Korean Studies への参加・発表
出張者：森類臣

◇2017年9月11日(月)～19日(火)

出張先：韓国 ソウル市
用 務：国立国学院国学研究室主催学術シンポジウ
ム参加及び韓国ソウル市での資料調査
出張者：森類臣

一般研究徳田班

◇2017年4月28日(金)～4月30日(日)
出張先：愛媛県国際交流協会、愛媛大学教育学部

用 務：2017年度の「移住と共生」研究会の企画打ち合わせのため

出張者：徳田剛

◇2017年8月1日(火)

出張先：京丹後市国際交流協会

用 務：京丹後市国際交流協会・麻田友子事務局長との面会、ヒアリング調査のため

出張者：徳田剛

◇2017年8月7日(月)～8日(火)

出張先：出雲市役所文化国際室、島根県庁文化国際課、しまね国際センター

用 務：ヒアリング調査のため

出張者：徳田剛

一般研究脇中班

◇2017年9月5日(火)～17日(日)

出張先：ヘルシンキ刑務所、更生保護施設・AGGREDI、ウェイバック・オスロ、ナルヴィック、サンダーケル更生保護施設

用 務：北欧における更生保護実態調査

出張者：脇中洋

一般研究関本班

◇2017年8月17日(木)～18日(金)

出張先：国文学研究資料館

用 務：『苔の衣』諸本調査

出張者：関本真乃

一般研究宮崎班

◇2017年7月29日(土)～30日(日)

出張先：石山寺

用 務：石山寺一切経の調査、特に〈阿闍世王経〉諸本三種の調査をするため

出張者：宮崎展昌

◇2017年8月18日(金)～28日(月)

出張先：トロント大学

用 務：The XVth Congress of the International Association of Buddhist Studies (IABS)に参加して、研究発表するため

出張者：宮崎展昌

一般研究堀田班

◇2017年7月27日(木)～30日(日)

出張先：東京大学

用 務：①東京大学東洋文化研究所での資料調査(7/27～28) ②ジャイナ教律文献研究会への参加(7/29～30)

出張者：堀田和義

一般研究阿部班

◇2017年5月26日(金)～6月4日(日)

出張先：タイ・バンコク市およびプノンペン市

用 務：東南アジアサッカー市場に関する現地調査

出張者：阿部利洋

一般研究高瀬班

◇2017年6月16日(金)～19日(月)

出張先：帯広市とかちプラザ・幕別町立幕別小学校

用 務：小学校の体育教材の開発に当たっての実態調査

出張者：高瀬淳也

一般研究福田班

◇2017年7月10日(月)～11日(火)、24日(月)～25日(火)

出張先：大谷大学

用 務：ゴク・ロデンシューラフ『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』註に関する研究会

出張者：崔境眞

一般研究田鍋班

◇2017年9月15日(金)～16日(土)

出張先：東京大学本郷キャンパス

用 務：日本宗教学会第76回学術大会参加・発表

出張者：田鍋良臣

一般研究塚島班

◇2017年6月2日(金)～4日(日)

出張先：東京大学駒場キャンパス

用 務：日本フランス語フランス文学会春季大会への参加

出張者：塚島真実

◇2017年9月29日(金)～10月1日(日)

出張先：東北大学文学研究科

用 務：連続シンポジウム「象徴主義とは何か」への参加

出張者：塚島真実

一般研究清水班

◇2017年5月27日(土)～28日(日)

出張先：武蔵野大学（有明キャンパス）

用務：パリー学仏教文化学会第31回学術大会への参加

出張者：清水洋平

◇2017年7月15日(土)～16日(日)

出張先：東京国立博物館

用務：①国際シンポジウム「タイの仏教美術と王権」への参加（7月15日）

②研究会議（7月15日：18時～、7月16日：8時30分～）

出張者：清水洋平

一般研究渡邊班

◇2017年6月3日(土)～4日(日)

出張先：龍藏院

用務：研究打ち合わせ、龍藏院デプン・ゴマン学
堂日本別院特別法話会参加および調査

出張者：渡邊温子

◇2017年8月18日(金)～9月17日(日)

出張先：骨輪禅堂、大珠院West、Tahoma monastery、
Nalanda west、Thrangu monastery、Sakya
monastery of Tibetan Buddhism、ハーヴァー
ード大学、Buddhist digital resource center
(BDRC)

用務：アメリカにおける仏教調査及びハーヴァー
ード大学・BDRCにおける研究打ち合わせ

出張者：渡邊温子

一般研究大原班

◇2017年6月10日(土)、9月24日(日)

出張先：東京家政学院大学千代田三番町キャンパス

用務：「南欧研究プロジェクト研究会」への参加

出張者：大原ゆい

一般研究藤田班

◇2017年8月7日(月)～22日(火)

出張先：フランス国立図書館

用務：サン＝テグジュペリの著作に関する文献・
資料調査

出張者：藤田義孝

■人事

■特別研究員

□新規採用（2017年6月30日付）

*翁 和美

現職：任期制助教

研究期間：2017年6月30日～2020年3月31日

研究課題：認知症患者との「関係性」についての新モ
デルの構築と展開—「主体」論を超えて

研 究 所 報 第 71 号

2017年12月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2017 Otani University Shin Buddhist Comprehensive
Research Institute